

新  
獅子  
吼

開成学園



Kaisei Debate Club

弁論音



開成学園

弁論部

はじめに	大会記	自由記事	付録
目次 >			
監督挨拶 >			

▷ 目次

++ **青文字**を押すと該当ページに移動します ++

## はじめに

[p.02 >>> 目次](#)

[p.03 >>> 監督挨拶 —2020 シーズンを振り返る・完全版—](#)

## 大会記

[p.09 >>> 2019 秋大会記](#)

[p.12 >>> 2019 創価冬大会記](#)

[p.15 >>> 2020 D C S](#)

[p.22 >>> 2020 秋大会記](#)

## 自由記事

[p.27 >>> 新型コロナ記事 —コロナとディベート—](#)

[p.30 >>> 部員自由記事](#)

- ▶ 弁論部に入りました
- ▶ Discord を語る
- ▶ 弁論部あるある

## 付録

[p.33 >>> 質問掲示板](#)

[p.36 >>> 先輩と語る質疑](#)

[p.42 >>> 先輩と語る一反](#)

はじめに	大会記	自由記事	付録
目次 >			
監督挨拶 >			

## ▷ 監督挨拶

監督 神尾雄一郎

### 2020 シーズンを振り返る・完全版

新型コロナウイルス感染症の拡大によって世界中が震撼した 2020 年。我が開成中高弁論部も例外なく、大幅に活動が制約されるシーズンとなった。この歴史的な一年を忘れないようにするため、この一年の活動について監督の立場から記しておくことにしたい。

#### 1 月 5 日 第 19 回ディベート冬季大会で優勝

今シーズンを占う創価高校主催の準公式戦で、昨年全国 3 位の聖光学院を破って優勝を飾る。肯定側第一反駁を務めた平山が、昨年の第 2 回ロジニケーション・ジャパンカップに引き続きベストディベーター賞を獲得。悲願の全国優勝を狙う上で必要な、新たな中心選手の誕生に心沸き立つ。打ち上げは、当日不参加のメンバーも加えて、もんじゃ焼きとお好み焼きの食べ放題で盛大な新年会となる。

#### 1 月 26 日 第 25 回全国中学・高校ディベート選手権（ディベート甲子園）の実施時期と場所が公表される

そもそも、本年は東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会の開催によって、例年のように 8 月第一週土日月の 3 日間開催は絶望視されていた。まだ新型コロナウイルス感染症拡大の影響が一部に留まっていたこの時期、「9 月もしくは 10 月に、首都圏で開催する予定」が公表される。これにより、例年 9 月の秋分の日頃に開催される本校文化祭との重複が懸念されたため、全国大会組と文化祭組をどのように分けるかの想定が始められる。

#### 2 月 16 日 中一中二杯を実施

近年恒例の部内行事となっている、中一中二杯を実施。この時点では新型コロナウイルス感染症拡大の影響も広まりつつあったが、対面での接点を持つ機会がしばらく持てなくなるという認識までには至っていなかった。

#### 2 月 26 日 第 25 回ディベート甲子園論題発表延期の通告がなされる

学校行事や部活動等の自粛を要請されるようになってきたことを受け、各支部の春季大会などの実施が危ぶまれるようになったために論題発表の延期が発表される。また、同日政府から「イベントの開催に関する国民の皆様へのメッセージ」として「多数の方が集まるような全国的なスポーツ、文化イベント等」について「大規模な感染リスクがあることを勘案し、今後 2 週間は、中止、延期又は規模縮小等の対応」が要請される。

#### 2 月 27 日 第 21 回関東甲信越地区中学・高校春季ディベート大会中止決定

はじめに	大会記	自由記事	付録
目次	>		
監督挨拶	>		

前日の諸決定を受け、関東甲信越地区中学・高校春季ディベート大会が東日本大震災発生後の2011年以来9年ぶりに中止されることが決定。

## 3月 オンラインでの部内大会実施と九州地区開催のオンライン大会への参加

この頃は個人的に書籍執筆の業務に追われていたため、部活動には特に関与せず、部員が主体的にオンラインでの部内大会を実施したり、九州地区開催のオンライン大会に参加したりして、モチベーションの維持に努めていた。

## 3月20日 第25回ディベート甲子園論題の4月発表が示される

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の開催について調整が続いていた頃、第25回ディベート甲子園論題の4月発表が示され、一筋の光明が差し込む。しかし、この4日後東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の中止が決定され、その後も一気に感染拡大が進んでしまう。

## 4月2日 中三よりオンラインでの中学部内戦実施提案がなされる

新学期の登校自粛が決定されたことを受け、中三よりオンラインでの中学部内戦実施提案がなされる。これを受け、6日に「日本はジェネリック医薬品（後発医薬品）の投薬使用を原則義務化すべきである。是か非か。」という論題を提示し、使用できる資料は、インターネット上において無料で入手できるものに限定するという条件付きで実施を認めることとする。

## 4月3日 全国教室ディベート連盟の臨時理事会開催の通告がなされる

新型コロナウイルスの感染拡大の状況を踏まえ、大会開催の是非も含めた審議を行うと発表され、第25回ディベート甲子園の中止が現実的なものとして受け止められるようになる。

## 4月11日 第25回ディベート甲子園及び諸活動の中止決定

2020年度の全国中学・高校ディベート選手権（ディベート甲子園）の全国大会及び、それに付随する地区大会の実施、さらに論題発表の中止が決定される。また「感染症の収束まで、大会以外の活動も含め、人と人の物理的な接触を促すことにつながる活動を中止します。」という方針が示されたことから、無期限の活動停止状況に追い込まれることに大きな危機感を覚える。

## 4月 オンラインでの活動について模索が始まる

開成中高弁論部監督と並行して、NPO法人ロジニケーション・ジャパン理事長を務める立場であることから、何とかオンラインでの代替大会の開催はできないか模索し始め、関係各所と協議する。特に、九州地区との関係を活かし、オンライン練習会の実施に取り組み、一定の手応えを得る。

しかし、協力を期待していた人物からの強固な反対に遭ったことや、自身の執筆業務が多忙を極めていたことから、主導的な立場として牽引していくことを実質上断念する。

はじめに	大会記	自由記事	付録
目次	>		
監督挨拶	>		

## 5月～6月・8月 オンラインでのミーティング実施

部長の佐々木と久方ぶりに電話で意見交換し、「Microsoft Teams」を利用して、高校・中学それぞれとオンラインでのミーティングを実施することを決定する。ミーティングでは、少なくとも8月中旬まで自身の執筆業務が途切れないという見通しと、オンラインでの代替大会の開催がかなり厳しいという状況を伝える。一方で、この頃大きな話題となっていた9月入学への移行についてのディベートを試験的に実施するよう要請する。

6月にも再度オンラインでのミーティングを実施し、部員からはオンラインディベート団体の活動が活発化してきており、そちらの活動に積極的に参加しているという報告がなされる。個人的には、完全に後手を踏んだという悔恨もあったが、とにかく執筆業務が途切れない状況を考えると、どうすることもできなかったという諦めの境地に至る。また、7月11日に新入生勧誘会が開催されることも報告される。

さらに本年2冊目の執筆が終わった8月初頭に、中一の指導についてオンラインでのミーティングを実施する。その結果、9月上旬に向けて中一中二杯を実施することが決定され、部員に委ねることとする。

## 8月10日 立論グランプリ開催の決定

2020年度の開催が中止となったディベート甲子園に代わる企画として、「立論グランプリ」の開催が決定される。個人的には強く興味が惹かれたが、ディベートの実戦が伴わない企画にどの程度の部員が参加意欲を持つか掴めなかったため、監督側から働きかけることは控えることとする。

## 8月30日 「第24回関東甲信越地区中学・高校秋季ディベート大会」のオンライン開催が決定

本年初の公式戦となる「第24回関東甲信越地区中学・高校秋季ディベート大会」のオンライン開催が公表される。「第24回」と定められたことから、中学は連覇がかかることに。しかし、主力の中三が修学旅行の日程と重なることが判明したため、中二主体で挑むことが確認される。一方、高校は高二的引退試合としての位置づけとすることが決まる。

## 9月13日 立論グランプリへの参加決定

中一中二杯が終了し、ようやくこの段階で部としての立論グランプリへの参加方針が決定される。9月30日の締め切りに向け、希望者を募って突貫工事でオンラインにて作業を進めることが確認される。ここでようやく、監督として主体的に関わる機会の回復がなされた。また、使用するツールとしてDiscordを本格運用することとなり、利便性の高さに驚かされる。

中学は救急車の有料化、高校は首相公選制という馴染みのテーマであったため、短期間でも効率よく作業が進められ、無事エントリーを完了する。特に高校は、選手が主体となって組み上げた立論にアドバイスしながら、最後の仕上げを施すという指導スタイルに手応えを感じる。一方、中学については関与する選手が限定されており、一体感をどう高めていくかに一抹の不安を覚える。

## 9月30日 「第24回関東甲信越地区中学・高校秋季ディベート大会」の詳細が発表される

関東甲信越支部より「第24回関東甲信越地区中学・高校秋季ディベート大会」の詳細が発表され、「チー

はじめに	大会記	自由記事	付録
目次 >			
監督挨拶 >			

ム全員が集まって1台のPCを使って参加すること」が可能という方針が出される。これを受け、大会当日はジーワンラーニングを利用して参加することを決定する。また、オンライン参加を回避する学校の存在を想定して、中学はaチームを中二の主力チーム、bチームを中一主体のチームとしてエントリーする。

## 10月25日 立論グランプリで中高揃っての決勝進出が決定

立論グランプリの予選結果が発表され、中学は4位、高校は1位という結果で決勝審査への進出が決定となる。個人的には、絶対の自信を持っていた中学での4位は衝撃的で、自身の指導力に自信を失う。その一方で、高校は1位という望外の結果を受け、高校チームを指導していくスタイルの確立にかなりの手応えを得る。

この結果を受け、映像審査に向けたオーディションを実施し、中学は中一大竹と中二品田、高校は高一西野と早川が選出される。

## 11月8日 公式練習試合に参加

秋季大会に向け、中学のみ公式練習試合に参加する。この日は、オンラインディバートの大会が別にあつたため、昨年の秋季大会以降に加入した中二や中一が多く集う。この日は1勝2敗となったが、購入していた集音マイクが適さないことや着席しての抑え気味な発声が求められること、救急車の有料化論題で目指すべき立論のスタイル、さらに反駁資料の不足など課題が顕在化し、秋季大会に向けた課題を明確に把握することに成功する。

## 11月 秋季大会直前調整

11月8日の練習試合に引率してくださった顧問の佐伯先生に感染防止対策を確認していただいたことで、対面での指導が可能となったことを受け、大会当日まで可能な限り対面での指導を実施する方針をとる。11日・13日・14日・15日・18日・20日・21日とかなり集中的に実施し、立論の修正・ポジションの確定・反駁の整理・新たなマイクでの音声でのリハーサルなど入念に準備する。立論や反駁については、本校が得意とする価値観を前面に押し出した押し切り型のディベートではなく、発生量を確実に押さえつつ、反駁でジャッジの心象をコントロールするディベートスタイルの重要性を打ち出す。また、音声については声を張り上げる形ではなく、スピードを落としたり間を空けたりといった形での抑揚を付けることを徹底させた。

## 11月17日 新執行部発足

開成中学応接室にて、部長西野、副部長田口、会計早川の新執行部発足が決定される。加えて、西野を高校主将に任命し、3年ぶりに部長と主将を兼務するスタイルをとることとなった。また、中学主将に品田を任命することとした。

11月22日 「第24回関東甲信越地区中学・高校秋季ディベート大会」にて中学が2年連続6回目の優勝、高校は初の準優勝



はじめに	大会記	自由記事	付録
目次 >			
監督挨拶 >			

本年唯一となる公式戦となった「第 24 回関東甲信越地区中学・高校秋季ディベート大会」にて、中学は b チームが予選 3 連勝の快進撃とコミュニケーション点の高さから堂々の 1 位で決勝進出。これに対し a チームは、初戦の不戦勝とコミュニケーション点の伸び悩みからまさかの 5 位に終わる。しかし、一致団結して挑んだ開智との決勝では歴史的な圧勝となり、見事 2 年連続 6 回目の優勝を果たした。また、ベストディベーターに選出された池上は中一として中島以来 2 人目の受賞となった。

一方、高校も予選は 3 連勝で決勝に進出したものの、初優勝を賭けて挑んだ決勝では創価に屈し、創部以来初となる悲願の地区制覇には届かなかった。しかし、実は準優勝も秋季大会としては初の快挙であり、引退試合として一定の成果を残すこととなった。

オンライン開催では、相手校の不戦敗や通信環境の不備、また当方も無線 LAN の接続がパンクするといった不測の事態が発生したが、有線 LAN を急遽用意したことや、公式練習試合での経験を生かすことで何とか困難を克服できた。また、長めの準備時間を効果的に活用するためにチーム内でのコミュニケーション力がより問われるようになったことや、配線コードや資料の整理、マイクやカメラの調整といったサポートの仕事が増えたことで、より組織力が問われるようになったという実感がある。引き続き、開成ならではの団結力を強みとして、オンラインディベートでも強豪校の一角を占められるよう精進していきたいと願う次第である。

また、中学の救急車の有料化という論題には、何度となく部内戦や文化祭で取り組んできたという部の歴史があることに加え、監督就任 2 年目で 6 月予選を全勝したのに全国出場を逃した 2004 年、エースを擁し優勝を意識していた全国大会においてベスト 8 で東海中に一蹴された 2012 年、2020 年立論グランプリ予選 4 位の悔しさも込められている。さらには、個人的にも大学院時代に授業の研究テーマとしても取り組み、3 冊の著書でも取り上げたほどの思い入れのある論題であったことから、初めて優勝できたという感慨は何にも増して大きなものがあつた。監督就任 19 年目にして、また新たにディベートの取り組み方の引き出しを増やすことができたように思う次第である。

一方、高校についてもきちんと公式戦の形で引退試合を迎えさせてあげられたことに対し、大会関係者や御家族など関係各位に厚く御礼申し上げたい。苦境の中でも共に戦えたという実感と、高一の発案で手渡された感謝の色紙は、何よりの財産となると信じて疑わない。個人的にも、直接一人一人に感謝の言葉を伝えられたことで、彼らとの大切な時間をきちんと締めくくれたという温かな気持ちに包まれ、満ち足りた気持ちとなった。

## 12 月 13 日 立論グランプリ決勝審査で高校 3 位、中学 5 位に終わる

中学・高校共に予選順位を落とす結果となり、大いに落胆する。敗因としては、「秋季大会の準備に力を入れていたために、モチベーションを高められなかったこと」「動画撮影における音量調整に失敗したこと」「立論の読み手の選出に時間をかけすぎたこと」が挙げられる。来年も開催されるようであれば、立論グランプリ班を結成し、アベック優勝した東海中高に対抗できる体制の整備が必要であると反省した。

## 12 月 18 日 部室大掃除を敢行

長年の課題であった部室大掃除に取り組む。監督神尾がテナントビルを契約していなかった 2013 年以前

はじめに	大会記	自由記事	付録
目次 >			
監督挨拶 >			

は時折活動場所として活用していたが、今回の大掃除で4名分の机と椅子が復活し、作業スペースとしての機能がある程度回復した。また、過去の優勝盾はジーワンラーニングで保管することが決まる。現在ジャッジとして活躍している方々が書いた色紙が発見されたり、かつての先輩方の写真が発掘されたりして大いに湧き立った。

12月22日 2021年に向けた部員総会を開催する

新執行部による中高一堂に会した部員総会を開催する。2021年の見通しが不透明な中、部活動全体の充実を図るための構想が練られる。また、年明けの文化祭についての対応について協議がなされる。

12月27日 第20回ディベート冬季大会がオンラインで開催される

例年とは異なり、オンラインの即興型として年内に開催される。秋季大会で課題となった、無線LANの拡充としてモバイルWi-Fiルーターとクレードルが投入される。さらに、貸会議室も駆使して、4チームで参戦する。

以上振り返ってみると、8月以降全国教室ディベート連盟関係の企画や大会が動き出して活動方針が明確になったことや、感染防止策の徹底により対面での指導が許されたことで、かなり活動実態を回復させることができたように感じている。一方、そもそも新型コロナウイルス感染症拡大の影響とは関係なく個人的に執筆業務に追われ続けた一年であったことから、もし例年通りの開催であったとした場合には果たしてどの程度貢献できたのだろうかという思いもある。



はじめに	大会記	自由記事	付録
	2019 秋大会 >		
	2019 冬大会 >		
	2020 DCS >		
	2020 秋大会 >		

## ▷ 2019 秋大会記

### はじめに

2019 年 11 月 23 日に第 23 回関東甲信越地区中学・高校秋季ディベート大会が開かれ、中学部門で開成チームが優勝しました。2019 年 11 月 23 日というと今から 1 年以上前ですが、

- ・大会が潰れて書ける大会が無い
- ・文化祭延期の影響で 1 年以上経過した

、という背景があるのでこの部誌に載っています。1 年以上も前の栄光について書くなんて見苦しいと思われる方も多いでしょうが、ぜ～んぶコロナのせいということでお許しを。

ここではタイトルの通り予選落ちから逆転優勝した大会記が書かれているのですが、「大会として予選に落ちて優勝できるっておかしくない？」と思われた方、、、正解です。若干の詐欺タイトルとなってしまうので、その点についてまず説明させていただきます。関東甲信越地区では全国大会に進むために 6・7 月に予選大会が開かれるのですが、2019 年の開成中学チームはその予選で敗退し、全国大会に進むことができませんでした。このことを「予選落ち」と呼んでいます。なお、予選を勝ち抜くのは関東甲信越の上位 6 チームで、正確な順位は出ていませんが開成は 12,13 位くらいだった気がします。この予選、全国大会の後にこれらの結果とは独立した関東甲信越地区の秋季大会が開かれ、その時に開成チームは優勝しました。まあいずれにせよ夏ボロボロだったチームが逆転優勝したことに変わりはありませんので、部誌を閉じずにそのままご覧ください。

### 論題解説

まずこの大会では何をテーマにディベートをしたか簡単に説明させていただきます。論題は「日本はタクシーに関する規制を大幅に緩和すべきである。是か非か」というものでした。これは 2019 年のディベート甲子園で使われた論題で、秋大会はその続きということになります。そもそもタクシーに規制があること自体も知らないし、興味もないという方がほとんどだと思いますので、ここではすごすごっくりとした説明をします。

肯定側（タクシー規制は取っ払うべき派）の主流な議論としては、「ライドシェアを普及させて交通に困っている人を助けよう！」というものです。ライドシェアというのも日本ではあまり聞きなじみの無い言葉だと思いますが、簡単に言うと一般人がタクシーをやるサービスのことです。最近街に四角くて大きいリュックサックを背負った人が自転車に乗って食べ物を届けている光景を見にする方も多いと思いますが、あの「Uber Eats」の「Uber」は海外のライドシェアサービスの会社の名前です。日本では規制によってライドシェアサービスを行うことができないので、「Uber Eats」の方だけ普及している状態になっています。また、「交通に困っている人」は、地方の高齢者のような「自分で運転するのが難しく、他の移動手段を持たない人」を挙げている場合が多かったように思います。

はじめに	大会記	自由記事	付録
	2019 秋大会 >		
	2019 冬大会 >		
	2020 DCS >		
	2020 秋大会 >		

否定側 ( タクシーの規制は残すべき派 ) の主流な議論は、運転手の賃金低下というものでした。規制を無くすとタクシーは自由競争にさらされ、結果として運転手の賃金が下がるというものです。ただ、これだけだとなぜタクシー業界だけ自由競争に任せてはいけないのかという理由付けが弱いので、ここからさらに「タクシー運転手は今でもギリギリの賃金で働いていて、これ以上下がると生活苦になる」だとか「賃金が下がると長時間働くようになり、事故を起こすリスクが高まる」といったタクシーが市場の外にもたらす悪影響を挙げているチームが多かった印象です。

## 逆転優勝のストーリー

----- 7 月予選の日

「1-2 で否定側〇〇中学校の勝利です。肯定側開成中学校さんもお疲れさまでした。」

この瞬間、

( ああ、僕たちの夏は終わったんだー。 )

目の前が真っ暗になるほどの喪失感に襲われた。

ーみたいな書き方を素人がするの読者の方にはなかなか辛いものがあると思うので、ドラマチックな要素は省いて淡々と。( こういうのが好きな方は文芸部あたりへ行ってみてはいかがでしょうか )

では、7 月予選までの事を簡潔にまとめると、「なんか勝てない」です。努力していないわけではないし、相手がそんなに格上というわけでもない。負ける試合も全部 2-1 という微妙な負け方でした。結果 7 月予選で敗退し筆者もかなり落ち込みましたが、落ち込んだままでは意味が無いので 7 月から大会に向けた活動を始めました。7 月予選は中三 ( 当時 ) 5 人で臨んだのですが、秋大会では中学部門 1 人 ( 筆者 )、高校部門 2 人、即興部門 2 人に分かれ、中学部門は筆者 + 中二 7 人でエントリーすることになりました。8 月に全国大会があるため、予選を勝ち抜いたチームは全国大会への準備をすすめる中、我々 8 人は 4 ヶ月後の秋大会へ向け準備をすすめていました。そして時は流れ 11 月 23 日。大会のシステムとしては、初めに各チーム 2 試合行いそのうちの上位 8 チームが 3 試合目を行う。そして 3 試合含めた結果の上位 2 チームが決勝戦に進出するというものです。開成チームは 2 試合時点でも 3 試合時点でも 1 位を保ち決勝進出。決勝で苦戦するも 2-1 で勝ち、という結果になりました。

つまり、秋大会当日は全勝しました。あっさり書いてしまったがために感動はありませんし「なんで勝てたの？」と思った方も多いでしょう。個人的に考える勝てた理由を次にかきたいと思います。

はじめに	大会記	自由記事	付録
	2019 秋大会 >		
	2019 冬大会 >		
	2020 DCS >		
	2020 秋大会 >		

## どうやって勝ったのか

ここでは4つの要素に分けて勝てた理由を分析します。

### 1. 早め早めの準備

7月予選で敗退したこともあり、秋大会までの時間は他のチームよりもあったと思います。そのため、早めに準備を行うことができ、それが功を奏しました。例えば、普段の大会では大会で使う原稿を大会前日の夜遅くまで書いている、ということもありますが、今回の大会では数日前に原稿を完成させ、前日は活動を行いませんでした。これによって、余裕をもって戦うことができました。

### 2. 練習試合の使い方

秋大会までの期間に、4回全国大会出場校との練習試合を行いました。それぞれの練習試合ごとに、「スピーチ力を伸ばそう」「本番への調整をしよう」といった目的を持って試合できたことは成長につながったと思います。また、練習試合の申し込みなども早めに行うことで満足のいく練習試合を行えます。

### 3. 勝ち筋の意識

7月予選までの「なんか勝てない」状態を脱するために、試合においてどの論点で勝つか、ということを意識しました。具体的な例を挙げると、否定側立論は通常「固有性-発生過程-深刻性」という3要素で構成するのですが、「固有性」の部分の切って、発生過程の論点を厚くしました。そして、発生過程を守り切ることで勝つという試合展開をチーム内で共有し、実際そのように試合をすることができました。

### 4. 長時間労働

ディベートは準備が8,9割と言われる競技で、もちろん準備をするだけ強くなることができます。あまり長時間準備することを推奨することは好ましくないと思いますが、事実としてかけた時間の分だけ結果に反映される競技だと言うことはできます。

## おわりに

筆者にとっても1年以上前のことでかなり記憶が曖昧な部分が多いのですが、いろいろ思ったことを書いてみました。結論としては、「諦めずに勝つためにすべきことをすれば勝てる」とでもしておきましょうか。もちろん例外なんていくらでもあるので嘘といえば嘘かもしれませんが、ただ、ディベートという競技自体このような逆転を起こせる面白いものであることは確かだと思います。ディベートで結果を残しているチームは意外とこのようなドラマが背景にあることが多い(個人の感想)ので、それを知ってみるのもまた一つのディベートの楽しみ方かもしれません。

はじめに	大会記	自由記事	付録
	2019 秋大会 >		
	2019 冬大会 >		
	2020 DCS >		
	2020 秋大会 >		

## ▷ 2019 創価冬大会記

ちょうど一年前のことになりますが、創価高校雄弁会さん主催の第 19 回ディベート冬季大会に参加させていただきました。開成は以下の通り 3 チームに別れて参加しました。

### A チーム

佐々木 小林 (優) 平山 西野  
児玉 平山 佐々木 西野

### B チーム

小林 (幸) 小林 (直) 中島 鈴木  
田中 (莉) 田口 早川 中島

### C チーム

澤畑 緒方 島田 泉原  
品田 田中 (僕) 玉館 島田

サイドは上／下に対し肯定側／否定側、ポジションは左から立論、質疑、一反、二反です。

**太字**が当時の高 1、**斜体**が当時の中 1 です。

あみだくじ等でなるべく均等に分けたつもりだったのですが、こう見ると A チームに人が固まっているようです。プレパは全員でやりました。これだけの人数を動かして議論を作るのは初めてで不安もありましたが、予想以上に後輩たちが積極的に参加してくれて助かりました。特に中 1 は流れを追うので精一杯だったのですが、自主的に質問や提案をしてくれて嬉しかったです。ありがとう。僕 (平山) も今までで一番図書館に通ったと思いますが、行くとよくチームメイトと遭遇しました。そんなこんなで、広く、そしてかなり質の高い議論が完成したと思います。

開成が立てたメリットは「被告人の人権保護」でした。

1 つ目の筋は防御権の保障、すなわち「被告人にも人権があるから、彼らの弁護活動もきちんと出来るようにするべき。ましてや冤罪は以ての外」というものです。裁判員裁判には「公判前整理手続」というものが存在します。これは裁判を短期間で行うための事前の話し合いで、裁判員の負担軽減を目指したのですが、ここに 2 つ問題があります。

1 つ目は争点整理の名目の下、弁護側は全ての証拠の開示と主張の前倒しが要求されるのに対し、検察側にはその義務がない、という点です。ディベートで言うと、一方的に立論と反駁の全てを公開して試合をする

はじめに	大会記	自由記事	付録
	2019 秋大会 >		
	2019 冬大会 >		
	2020 DCS >		
	2020 秋大会 >		

ようなものです。つまり検察側は相手の議論を知った上で裁判に望むことが可能で、被告人の弁護が不利になるのです。

2つ目は単純に裁判が短期間になり、弁護に時間が足りなくなる、という点です。一般に無罪立証は有罪立証より難しく、時間が短いほど無罪立証が困難になります。この2点が裁判員裁判廃止によって改善される、というのが1つ目のメリットです。

2つ目の筋は、裁判官が法の理念に背いて判決を下すことを防ごう、というものです。長くて少し難解ですが、次の文章をよく読んでみてください。元早稲田大学教授の今関さんの2012年のものです。

主権者国民といってみても、不可分の主権は個々の国民が個別に行使できるような権力ではない。その国民が法を知らず、常識や市民感覚に依拠して量刑を行うことは、主体の正統性と基準の妥協点において二重に問題である。量刑判断は、犯した行為との均衡だけでなく一般予防、特別予防という刑事政策的観点も考慮してなされるので、裁判官にとってすら難しい判断である。量刑を常識にゆだねれば、刑罰が単純に応酬や復讐、あるいは社会からの犯罪者の隔離の文脈でとらえられ、犯罪者の更生の問題は後景に退き、その分、厳罰化へ向かう可能性が高くなるだろう。国民主権だから司法権も国民が直接行使できるといった無媒介な主権論は、法の支配が貫徹すべき司法の領域には特に場違いであり、権力の至高性を連想させる主権国民という主体を召喚するがゆえに立憲主義・自由主義と強い緊張関係に立つ。

肯定側の主張はこの一枚に集約されていると言って間違いありません。僕が今まで出会った資料の中でも、指折りの良い資料です。すべての単語に大事な意味があり、主張に過不足無く合致し、字面もかっこいい。次の段落でこの文章の解説をしますが、すでに意味が理解できた方は飛ばしてください。

裁判員が判断することの根本的な問題は、法律、特に刑法を理解していないことです。法律で犯罪者を処罰するのには大きく3つの理由があります。①罪を償うため(応報刑論)、②犯罪の抑止力となり(積極的一般予防)、犯罪は良くないことという規範を作るため(消極的一般予防)、③受刑を通じて犯罪者を更生させるため(特別予防)、というものです。裁判官は3つを理解し刑罰を決めていますが、裁判員は①しか理解しておらず、自分の常識や、世論を元に判断します。これにはいくつか問題があります。1つ目は、正当性の問題です。そもそも刑法で人を処罰できるのは、国民主権に則り、みんなで決めた法律で処罰すると決めたからです。一方裁判員個人の感覚で判断することは認められていません。国民全体のものの権力を、一人の人間の判断で行わせることになるからです。2つ目は、基準の妥協点、すなわち平等性の問題です。個人の感覚や世論は揺れ動きますし、時代や人によっても異なります。操作される可能性もあります。すると、同じ罪を犯しても異なる刑罰になる可能性があり、問題です。3つ目は、犯罪者の更生が難しくなるという問題です。憎しみや「犯罪者は閉じ込めておけ」といった考えで判断すると刑罰が重くなり、犯罪者が社会から隔離されます。これは刑法の理念③に反します。そもそも司法は法律を司るものなので、特に法の支配に従う必要があります。

肯定側は特に最後に挙げた犯罪者の更生が難しくなることを重く見ています。実例として、2010年に石巻



はじめに	大会記	自由記事	付録
	2019 秋大会 >		
	2019 冬大会 >		
	2020 DCS >		
	2020 秋大会 >		

市で起きた少年事件の裁判を挙げています。これは少年法が適応され、まさに犯罪者を更生させることが目的の刑罰がなされるべきものです。しかし、裁判員は更生可能性を無視し、死刑を宣告しました。また、裁判官よりも裁判員のほうが処罰感情を重視して判決を下しているという統計も述べました。

デメリットは冤罪の増加としました。裁判員のほうが事実認定において優れている、というものです。裁判員のほうが裁判官として優れている点として、次の2つが挙げられます。

1つ目は裁判員独自の経験を活かせる点です。エリート街道を進んできた裁判官に比べ、裁判員のほうが多様な人生経験を持っています。実際の裁判でも、裁判員が会社勤めの経験から、証言を「会社での立場を慮ったのではないか」と疑うなど、裁判官の意見は生かされていると言えるでしょう。

2つ目は新鮮な気持ちで裁判に望める点です。日本の刑事事件に置いて、検察が起訴したもののうち99%は有罪ですから、普段から裁判を繰り返している裁判官は有罪推定で裁判に臨んでいます。実際東電OL事件では、証拠にない部分を裁判官が想像で補い、その事実認定に基づいて冤罪が生まれました。その点裁判員は純粋な気持ちで裁判に臨んでいます。

実際に裁判員裁判により有罪率は低下しており、冤罪は減っていると言えるのでは無いでしょうか。

では実際の大会での議論を見ていきましょう。開成は予選終了時点でAチームが1位、Bチームが3位でしたので、Aチームが予選2位の聖光高校さんと決勝です。開成が肯定側です。

開成のメリットはさっき説明した通りです。聖光さんのデメリットは「司法と民意の乖離」でした。裁判官が裁判員の意見に説得されて司法が変わる、というのが大きな筋です。特に性犯罪については、明治の男尊女卑の価値観に基づく刑法が裁判員による判決によって厳罰化された、らしいです。法律の目的は規範意識の醸成で、法律が国民の価値観と合致しないと法律による秩序形成が出来なくなる、というインパクトでした。メリットと正反対の理念ですね。メリットに対しても、今厳罰化しているのは国民の価値観に合わせるため、実際石巻市の少年法の事例でも裁判官も死刑に賛成しているし、裁判官の中でも色々議論があつて、だから破棄されずにいる、という反駁がありました。

そこで肯定側は、2つ大きな反駁を打ちました。1点目は、裁判に直接関わらずとも司法を変えることが出来る、というものです。具体的には、裁判批判を通じ、実際に性犯罪の厳罰化を裁判員制度導入以前から進めていたという資料を打ちました。2点目は、だからこそ「犯罪者の排除」という副作用を生まないために間接的に裁判を変えていこう、という話をしました。ここの取り方が判定の分かれ目となりました。裁判批判では犯罪行為とのバランスといった理性的な理由で司法を変えていたのに、直接市民が裁判に介入することで処罰感情という理由に変わってしまった、みたいな話をもっとできれば良かったと思います。

メリットの防御権の筋に対しては、「公判前整理手続で弁護側も証拠を請求できる」という反駁があったのですが、「弁護側はどんな証拠があるのか知らないままピンポイントで請求しなければいけない」と返せたので、概ね肯定側の主張どおりに取られました。

はじめに	大会記	自由記事	付録
	2019 秋大会 >		
	2019 冬大会 >		
	2020 DCS >		
	2020 秋大会 >		

試合は7-2で肯定側勝利、優勝でした！開成としては2連覇！僕（平山）と小林（優）にとっても2連覇です。正直負けたと思っていて、初め判定で肯定側と聞いたときは、自分が肯定側だと忘れて「やっぱそうだね、」と落胆してしまいました。いい勝負だといろんな人に言って頂きましたが、聞き返すとそのとおりだと思います。チームメイトはもちろん、部員全員に感謝。ベストディベーター賞は僕が、二反のベストバロット賞は西野が頂きました。バロット 19 とか取ってたもんなあ。開成弁論部の前途は安泰です。

この大会が、高2にとって最後に参加した対面の大会になってしまいました。打ち上げにもんじゃを食べたのですが、おそらくあれが僕にとって最後の打ち上げです。寂しいものです。僕は今後大学等でディベートを続けていくかわかりませんが、いろいろと心残りはあるものの、いいディベートライフだったと思います。改めて主催してくださった創価高校さん、練習試合をしていただいた各校の皆様、対戦校とジャッジの皆様、ありがとうございました。（文責：平山）

## ▷ 2020 DCS

### 三行まとめ

- ・中学生がU20 のでっかい大会に出場
- ・準優勝。やったぜ！
- ・振り返り書きちゃうぜ！

### 概要

出場した大会：ONLINE Debate Championship 2020

今季最大規模の大会。例年の中高生対象の全国大会がなくなったこともあって開かれた。45 チーム参加。U20 と設定されており、高校生メイン。

論題：「日本は一般的国民投票制度を導入すべきである」

チーム名：「薄色」

泉原（開成）、鈴木（開成）、A さん（他校）の3人チーム。全員中3。

結果：準優勝



はじめに	大会記	自由記事	付録
	2019 秋大会 >		
	2019 冬大会 >		
	2020 DCS >		
	2020 秋大会 >		

## 論題解説

### 一般国民投票とは

国民投票とは個別の政策の決定を国民の投票により行うという制度です。

現状の日本では選挙で選出された国会議員や内閣が法案を作成し、提出され、国会で審議されて法律が完成します。この過程において国民の意見が直接反映されるのは選挙で議員を選ぶときのみです。

国民投票を導入すると、先ほどの過程とはまた別に、国民が政策を作り、それを投票で成立させたり、国会が成立させた法案を廃止したりすることができるようになります。

### 国民投票の種類

国民投票と言っても色々な種類があります。

ここでは主に二つの種類について触れます。

#### ・イニシアティブ (提案型)

法案の制定・改廃について国民が提案し国民投票を行います。

#### ・レファレンダム (拒否型)

法案の廃止、議会を通過した法案の否決のみを対象に国民投票を行います。

早速ですが、どんな議論が出てきたのか説明します。

## メリット

### ・民意の直接反映

日本は民主主義国家ですが、主権者たる国民の意見を直接政治に反映する手段は選挙しかありません。法案の作成は官僚や国会議員が行っています。その結果、民意と乖離した立法が行われる可能性があります。安全保障関連法案の強行採決などは有名な例です。一般国民投票制度を導入することで、個別の政策レベルで民意を反映できるようになり民意と乖離した政策をブロックしたり、国民が自分で法案を提出したりできるようになります。

## デメリット

### ・少数派の迫害

少数派に対する偏見はどんな人にもあると思います。プラン前は議員が公開された討論をし、政策審議をしているので、差別的な発言をするとバッシングを食らうなどの理由で少数派を迫害する法案の成立を防いでいます。しかし、プラン後は差別的な思想を持つ団体がそういった法案を提案し、秘密投票の中では国民もむき出しの感情が反映され、差別立法が行われる可能性があります。

はじめに	大会記	自由記事	付録
	2019 秋大会 >		
	2019 冬大会 >		
	2020 DCS >		
	2020 秋大会 >		

## ・衆愚政治

現状、法案の作成過程にはさまざまな段階がありその中で専門家の意見を織り込んでいます。しかし国民投票になると、我々一般市民は経済がどうか科学的にどうかそういった問題をほとんど理解していませんので、てきとうに判断を下してしまったり、将来的に必要な政策でも自分にデメリットがあると反対してしまったりという問題が発生します。(文責：鈴木)

## 決勝戦の振り返り

### 試合の概要

立華高校ディベート部 VS 薄色 (泉原は欠席)

(なお、立華高校ディベート部はチーム名で、僕が調べた限りだと実在はしないはずです。)

試合前 抽選によりサイドが否定側に決まりました。この論題は肯定側が有利なので少々残念ではありましたが、憧れの最強高校生チームと決勝戦で対戦できることに対してものすごくワクワクしていました。

### ～試合開始～

#### 肯定側立論

肯定側の立論はスタンダードな民意の直接反映メリットを堅実に立てたうえで、観察 (プラン前後で変わらないこと) で政策はトレードオフなので誰が決めても失敗はあり得ることであって一概にいい悪いは言えないというものを入れ、解決性と重要性で仮に国民投票で失敗してもあとから国民自身が修正できるというものを加えたものでした。

どちらも最後まで残ってしまうとデメリットを大きく削られてしまうものでした。

#### 否定側質疑

立華高校ディベート部はとても強いチームだったので練習試合の時からマークしており、どんな立論を使ってくるかはなんとなくわかっていたので事前に対策をしており、準備時間も落ち着いていました。

しかし、肯定側の応答がうますぎでなかなか糸口がつかめませんでした。

#### 否定側立論

否定側の立論は僕が読んだのですが、僕はあまり活舌が良くないので、公式戦で立論を読むことはほとんどありませんでした。しかし、練習すれば意外とできるもので本番は楽しく読ませていただきました。

大まかな立論のストーリーは固有性で議員が痛みを伴う政策でも実行するモチベーションを持っているという立証をし、発生過程以降は衆愚系のスタンダードなものでした。工夫としては深刻性の将来のことまで考えて政策が実行されるべきという論点で資料を3枚も使って手厚く説明したところです。メリットとデメリットの価値観の比較で重要なのでかなり丁寧に立証しました。

はじめに	大会記	自由記事	付録
	2019 秋大会 >		
	2019 冬大会 >		
	2020 DCS >		
	2020 秋大会 >		

## 肯定側質疑

今まで受けた質疑で一番苦しかったです。立論の弱点をピンポイントに突かれました。

具体的には、僕たちの固有性では議員の話しかしていなくて実際の立法過程には官僚という存在がいることです。これがのちの肯定側第一反駁に大きく影響してきます。

## 否定側第一反駁

事前に対策していたので準備時間中はどんな順番で打つかの確認と、ダウト(資料を使わない反駁)の確認をしていました。

大まかな戦略としては3つ

- ①虚偽のプロパガンダが流れ、国民が扇動されてしまうため、肯定側の重要性で言っているようなメリットとデメリットを把握して国民自身が決めるべきというのは達成されない。
- ②インターネットの情報はフィルターバブルがかかっていて国民は偏った情報しか入手出来ず、重要性は達成されない。
- ③安保法案のような外交問題などは失敗したらやり直すと言っても具体的にどう修正するのか。

このうち①が一番重要でこれさえ残すことができれば解決性と重要性のつながりを切り、デメリットの発生にかかわらず勝利できます。

## 肯定側第一反駁

あれだけ重い反駁を打ったのに完璧に再反論をされたうえに、デメリットへのアタックも強烈なものでした。特に厳しかったのが固有性へ反論です。質疑であぶり出された、官僚という存在が長期的な視点で政策作成をしておらず、実際のところ社会保障費の予測なども楽観的になっている。というものと、議員は選挙で勝つために短期的な利益を優先するというものです。

## 否定側第二反駁

デメリットにきた反駁は重かったものの、まだまだデメリットは残せると思いデメリットの蘇生をしたうえで、解決性を切り、さらにメリットが発生したとしても深刻性と重要性の比較、具体的には、「そもそも政策の影響を受ける国民には将来世代も含まれているため、現代の人々だけのことを考えるべきではないし、あとから修正しても年金問題のように手遅れになることもあるから長期的視点で政策を作成している今の状況を維持するべき」で押し切るという戦略を取りました。

固有性の残し方としては、官僚の話は固有性の議員のロジックにはストレートに当たってなくて議員立法のような形で残る部分もある。議員が作った法案については、短期的なものもあるかもしれないが、国民に評価されたいというモチベーションと、官僚やほかの議員から評価されたいモチベーションはまた別の問題であり、後者のモチベーションが認められている以上固有性は残る。というものでした。

はじめに	大会記	自由記事	付録
	2019 秋大会 >		
	2019 冬大会 >		
	2020 DCS >		
	2020 秋大会 >		

デメリットのまとめはよかったのですが、この時点で2分半も使っており、残り1分半でメリットの処理をしなくてはなりません。結果的に解決性に打った虚偽のプロパガンダの反駁を伸ばしきれませんでした。

## 肯定側第二反駁

- ・メリットの発生自体は切り切れていないこと
- ・デメリットの固有性はないこと

について主にスピーチしていました。

特に固有性を議員立法という手段の存在で守ろうとしたのに対し、ニューと指摘されたのはやっぱり鋭いなあという感じでした。さらに政策を作成する過程で数字にゆがみが出ていることは事実であるという点で押し込まれてしまいました。そのためプラン前後の差分が非常に怪しくなっていました。

## 結果

6対1で肯定側の勝利。

## どうしたら勝てたのか

この試合の敗因は僕の否定側第二反駁にありました。ここでデメリットの組成に時間を割きすぎたあまり、解決性を叩く時間が短くなってしまいました。例えばデメリットの蘇生は厳しいと判断し、30秒程度でメリット処理に必要な否定側立論中の資料を確認し、残りの3分半ひたすらメリットをたたき続けるという戦法もありでした。

ここまで極端ではなくてもメリットの処理にもう少し時間を割いていれば勝てる可能性はありました。他の試合で固有性がボロボロにされているのを見て学ぶべきだったんですね…

## 最後に

ここまで読んでいただきありがとうございます。この試合は勝てる試合だったのに僕の判断ミスにより負けてしまいました。デメリットの蘇生に力を入れすぎましたね……

ただ、この試合僕は非常に楽しかったですし、対戦相手の方、観戦してくださった方々も楽しんでくださったみたいなのでそれはよかったなあと思いました。まずは楽しむことが一番大事ですからね。

これからも頑張っていこうと思うので応援よろしくお願いします！！（文責：鈴木）

はじめに	大会記	自由記事	付録
	2019 秋大会 >		
	2019 冬大会 >		
	2020 DCS >		
	2020 秋大会 >		

## 準優勝の要因

### ①練習試合をたくさんこなした

これは特に予選通過が決まってから決勝トーナメントまでの期間に言えます。大会の結果を残すためだけでなく今後の成長のためにも、自分がお手本にしているくらい格上のプレイヤーに積極的に練習試合を申し込みました。当然負けが込んだものの、勝負にはなることが多かったので課題が明確になり、戦えるという自信もつきました。試合勘も養うことが出来るので一石 n 鳥です  
(n は自然数の定数)。

### ②議論を柔軟に変更した

ありがちな失敗パターンとして、1つの議論に固執してしまうことが挙げられます。自分たちの場合は固執できるほど強い議論を組んでいなかったこともありますが、練習試合でジャッジからもらったアドバイスや他チームの議論を~~パターン~~てかなり参考にして議論を改善していきました。練習試合と合わせて「練習試合→課題が明確化→改善→練習試合→…」というサイクルを1週間単位で回すことが出来たのはかなり大きいと思います。

### ③準備の段階からビジョンを共有した

ディベートの試合においては、「勝ち筋」や「負け筋」をチーム全員が理解してスピーチすることが重要です。ここが中途半端だとパートによって言っていることが食い違ってしまい、ジャッジが解釈に困る、なんてことになりかねません。綱引きで全員がバラバラの方向に引っ張ったら効率が悪すぎます。

- i) 2反でどうスピーチするかをゴールとして
- ii) 相手の立論や反駁も織り込んだ上で
- iii) どう勝つか

を徹底的に話し合って共有しました。練習試合の音声公開されるので、決勝トーナメント直前は当たる可能性が高いチームを個別に対策していました。とにかく手札にある議論の中でどうにかする感じで頑張ってたと思います。

### ④原稿作成にリソースを割いた

共有したビジョンを基に頑張って立論や1反の原稿を作成しました。個人でも出来る作業なのですが、細かい表現などは合意が取れていたほうがいいので通話の中で進めていた記憶があります。というか通話のほとんどは原稿作成してるか試合の音源聞いているかだった気がする。

### ⑤適材適所でポジションを分担できた

本職が2反の3人なので発足時はどうなることかと思っていましたが、杞憂でした。立論は聞き取りやすさ・

はじめに	大会記	自由記事	付録
	2019 秋大会 >		
	2019 冬大会 >		
	2020 DCS >		
	2020 秋大会 >		

応答ともに抜群の A さん、質疑は安定感のある鈴木で問題ありません。肯定 2 反と否定 1 反という相対的に負担の低い反駁パートを泉原が担当し、肯定 1 反の A さんと否定 2 反の鈴木を準備時間中にサポートする形がハマりました。といっても決勝トーナメントは泉原が私用で欠場したんですけどね。

## これからのディベートの戦い方

これはオンラインでもオフラインでもそうですが、性悪説で予定を立てましょう。人は仕事をしない生き物です。特にチームで集まったり通話したりしないと一切仕事をしないものだと思っておくくらいで丁度いいです。ちなみに今回の大会で一番しごとをしなかったのは僕ですし、これからもそうでしょう。

人は仕事をしない生き物なので、仕事をするように動機づけする必要があります。そこで練習試合です。練習試合の予定を組むと仕事をせざるを得ない状況に追い込まれます。こうなると初めて人は仕事をします。

他校の人と組んで思ったこととしては、~~共学義塾~~危うく心の声が漏れそうになりましたが（危ないところでした）、プレパ通話中にグダることが出来ないことや、お互いの違ったスタイルを取り入れられるのは利点だと思います。一方で入賞賞品の配送の住所絡みの処理とか、内輪に比較するとコミュニケーションが取りづらいといった微小なデメリットもあります。とはいえ微小なので、他校の人とチームを組むことは強くオススメできます。

要するに結論としては、「ラーメンズを観よう」ということです。YouTube に公式の動画が 100 本挙がっているので思う存分観ましょう。万が一（そんな訳ないとは思いますが）ラーメンズを知らないという人がいたら困惑しているかもしれないので補足しておく、ラーメンズはお笑いコントユニットです。小林賢太郎（演出家）と片桐仁（俳優）の二人組で、「お笑い演劇の狭間」と言われることもあるくらい格調高いけど笑っちゃう漢字のコンビです。迷ったらとりあえず『バニーボーイ』『金部』『条例』『study』『名は体を表す』『QA』『風と桶に関する幾つかの考察』『不透明な会話』『超能力』『後藤を待ちながら』『いろいろマン』『ホコサキ』『無用途人間』『本人不在』辺りがオススメです。まあラーメンズにハズレなんてないけど。かくいう筆者も 50 本観たかどうかくらいの俄なので頑張ります。

楽しいラーメンズライフを！（文責：泉原）



はじめに	大会記	自由記事	付録
	019 秋大会 >		
	2019 冬大会 >		
	2020 DCS >		
	2020 秋大会 >		

## ▷ 2020 秋大会記

大会記 (というより日記?)

8/30

今年は夏の全国大会が中止となっただけに、公式に秋大会が行われると知った時の喜びは大きかった。引退試合ができるのだと。しかし正直なところ、論題をこの時はあまり好きにはなれなかった。「よりによって首相公選制かぁ…」と。

論題「日本は首相公選制を導入すべきである。是か非か」

首相を国民の直接選挙で選ぶべきかどうかという話だ。多少違うが、首相が大統領に変わるといえば分かりやすいか。この論題が特に変わっている訳ではない。むしろ逆で、ディベート甲子園では第1回、第18回に、創価高校が主催する冬の大会では一昨年に論題として採用されているというロングセラーの議論である。しかし調べて気づいたのは、その文献の少なさだ。2001年ごろを境にして、「首相公選制論」を唱える論者が数えるほどしかいなくなる。最近では日本維新の会が公約にはしているものの、そこに理論的発展は見られない。だからこの論題は「終わった議論」だと勝手に思っていたのだ。どうせ否定側が圧倒的に有利なのだろうと。

9/30

そんなことを考え、筆者は立論グランプリ (ディベート甲子園の代替行事。名の通り立論のみを応募し競う。) には出場しなかった。出場したメンバーは Discord を活用し、監督 (小論指導のプロ!) とともに立論を練り上げ、完成させた。結果はなんと……1位!!。以下にその立論を軽く解説する。(追記: 本戦では惜しくも3位だった)

肯定側: 国民による政策方針の決定

現在、国会には様々な意見の人がいてまとまらず、内閣では首相が与党内派閥の論理に振り回されるので、国民の声を政治に反映できていない。だから首相候補が打ち出す「政策体系」(女性活躍とか経済成長とか)を国民が選ぶことで、民意が一つになって一貫した政策を実行できる、というもの。実害よりむしろ、政治のあり方そのものを問う興味深い立論と評された。

否定側: 政府機能の停止

公選された首相の所属党が議会多数党と異なる「分割政府状態」になると、首相と議会が譲らず政治が停滞し、果ては予算案さえ通らなくなってしまうという未来を、大統領制であるアメリカの例を用いて予想したもの。実際オバマ大統領の時に起きた政府機能停止では、約240億ドルの経済損失がでたらしいとのこと。全体的に好評だったが、本当に「分割政府」になるのかという評価が審判によって分かれうると指摘された。



はじめに	大会記	自由記事	付録
	019 秋大会 >		
	2019 冬大会 >		
	2020 DCS >		
	2020 秋大会 >		

こうして秋大会に向け幸先のいいスタートを切れた…はずだった。

10/25

NADE 関東支部主催の、公式練習試合があった。が、高校チームは誰も出場しなかった。

11/8

NADE 関東支部主催の、公式練習試合があった。が、高校チームは誰も出場しなかった。(二回目)

当然 (?) 立論グランプリ以降の作業量はゼロである。かなりヤバイ。そんなとき創価高校 (かなりの強豪) から練習試合の誘いがきた。渡りに船、とばかりに誘いを受けるべきなのだが、即返信とはいかなかった。とにかく大急ぎで立論反駁を実用に耐えるレベルにしなくてはいけない。立論グランプリで 1 位の立論であっても、ディベートの試合において最高の立論であるとは限らない。試合の立論とは相手の反駁を想定したもの、つまりいくら良い小論文でも、反駁資料ひとつで成り立たなくなってしまうものは良い立論とはいえないからである。結局練習試合は 11/16 に行う運びとなった。

「今から間に合うのか？」そんな声も上がった。大会までちょうど二週間前のことである。

11/15

G1 ラーニング (神尾監督の営む学習塾) にて立論を完成させようと集まった。とりあえずは立論グランプリ (以下立グラと略す) の肯定側立論を改良しようと話が進んだところで、ある問題がでてきた。反駁ひとつで議論が怪しくなるかもしれない。どういうことかということ、立グラ肯定立論では政策体系を国民が選ぶことで民意に基づいた政治を行えることを主張していた。しかし A と B という候補者がおり、外交政策は A の方が人気で、経済政策はその逆、という場合どちらが首相になっても民意を一つにまとめたとは言えないのではないか、という反駁が来たら困るという訳だ。そのため民意を主軸にして立論を組むことは中止した。そのため、立グラで別に考えられていた筋の議論を追うことになった。首相が派閥から独立して権力をふるえるようになり、①政策が安定して経済が上向く ②外交政策で成果を見込める という二つで調べた。結果、どちらも発生過程がやや不安 (「派閥から首相が選ばれなかっただけで、派閥と無関係に政策できるの？」という疑問) などところがあったが、少なくとも①安定した政策の方はプランによるメリットを GDP などの数値を使い、大きく見せることが可能であったためひとまずそれで行こうということになった。

否定側の方はあまり変わらない。こちらは肯定側と違い、反駁を考慮しても既に一定の説得力がある一貫した議論になっている上 (「少なくともロジックとして立っている」と言ったりする)、立論に入れられる字数に余裕があったので継ぎ足していこうという運びとなった。他のデメリット案として①首相が大衆に迎合してしまう ②重要な法案が通りづらくなってしまふ の二つがあったが両者とも、現在と比べて大きく変化するかを示しにくく没となった。(②は特にねじれ国会と政府閉鎖との差が分かりにくい)。ただ政府閉鎖は政府閉鎖で深刻性が不安だった。このままだと深刻性は予算案が否決された時に 2 週間くらい困るね、程

はじめに	大会記	自由記事	付録
	019 秋大会 >		
	2019 冬大会 >		
	2020 DCS >		
	2020 秋大会 >		

度の短期的なもので、しかも何回も発生するかは怪しいと、規模が小さく判断されかねないため改善の余地は十分あった。

11/16

創価高校が肯定側、こちらが否定側で練習試合を行った。いざ蓋を開けてみるとどうやら、私たちは致命的なまでに遅れてるとか、知らない議論が山積しているとか、そういう訳ではないらしいと分かった。勿論創価高校の立論は洗練されており参考にするとところも多かったのだが、大筋は私たちが15日に出した結論とそこまで変わらず、私たちは少し自信をもつことができた。

11/19

学校で部活。発生過程までは盤石だと思われていた否定立論にひびが入った。「暫定予算」を調べていた高1Nの発言からだ。そのころの肯定側の作業では、現在でも予算の編成が遅れた場合、暫定予算という制度(財政法 §30)で対応することになっているため、これによって否定側、政府閉鎖の深刻性を減らせないと画策していた。

そんなとき彼が「日本では予算の空白が平成3年以降発生してないらしいですよ。」というので、何事かと思うとどうやらこういう訳らしい。昔は野党が審議拒否して予算案の成立を阻止することを「成果」とみなしていた面もあり暫定予算が必要になることが度々あったらしいが、そうした行動に批判も集まり、ついに与野党で「予算の空白は作るべきではない」ということに合意したということだ。あんなにいがみ合っているように見える与野党が現在でも合意できているのであれば、プランによって分割政府が起きたとしても「予算案否決」という可能性は考えにくくはないか。困った。

11/21

大会前日、学校が終わるとすぐG1ラーニングに集まった。前日にやることではないのは百も承知ながら、まず立論を完成させなければならなかった。

肯定側は、また新たな問題が発生していた。政権が長期化して経済が上向く、という主張の重要性に「内閣の存続期間が1年伸びるとGDP成長率が年率1%高くなる」というアヤシイ広告のような資料を使っていたのだが、本文のどこを探しても計算は載っておらず、他に似たような資料もなかったため、結局数値として経済的利益を示すのは難しそうだと悟った。そうこうする内に、高2NやH主導で内因性、解決性も変更することになった。立グラの立論に立ち返って、「民意」の議論を取り入れてみようというのだ。それにより「プランによって首相が派閥から独立して権力を振るえる」という立論は

「派閥内にも様々なイデオロギーを持つ人が存在するが、首相はその様々な意向を汲む必要があるため、時として矛盾するような政策(緊縮財政と財政出動を同時にするとか)を行っている。プランによって国民が一つの『政策体系』として首相を選ぶことで、矛盾しない一貫した政策が可能になる。」

というものに様変わりした。

はじめに	大会記	自由記事	付録
	019 秋大会 >		
	2019 冬大会 >		
	2020 DCS >		
	2020 秋大会 >		

一方否定側。こちらはこちらで 19 日に発覚した「予算案否決されない問題」が解決しておらず困窮中であつた。そのため肯定側がひと段落ついた後全員で取り組むことになった。あまりにも解決しなさそうなので、高 2Sh 中心に、新しい議論の筋を組み入れることを決めた。彼の「分割政府の時に財政赤字が拡大してたりしねえかな」という淡い希望から始まった話だったが、それらしき資料はなんと見つかった。ただ元となる研究が辿れず、理由を上手く説明できなかった。そんなとき、アメリカのレーガン政権が分割政府で赤字を増大させた大統領であると分かり、彼の事例が丁度いい補強になると思われた。しかし見つけた場所が問題で、「車とバイクのニュース」というところに (なぜか) あった Wikipedia 由来のその資料を使うかどうか真剣に悩んでいた (資料の信憑性という点で、ディベートに Wikipedia や個人ブログはタブーとされる)。そんなうちに日もすっかり暮れ、その帰り道も「いや流石にバイクニュースは使いたくないよ」とか「限りなく黒に近いグレーだけど…」などと話していた。

11/22

秋季大会当日。7:45 に G1 ラーニングに集合した。引率に来てくださった顧問の佐伯先生が公民の先生だったので問題のレーガン政権の赤字について尋ねてみると「確かあれは双子の赤字だから…」と説明してくれ、間もなくどんぴしゃりな資料を見つけて「これとかそうなんじゃない。」と。やはり持つべきものは公民科の顧問かと思いつつ、立論の完成を喜び合った。

一試合目 肯定 開成高 1:0 早稲田本庄 否定

対外どころか、部内でさえ練習試合を一度もしていない状態で望んだ第一戦目。ジャッジの反応にひたすら焦った一戦だった。概して、民主主義とか民意とかの話はディベートでするとき重要性でジャッジが首を傾げようものならその試合はかなり不利を覚悟しなければいけないのであるが、まさにそんな状況かと思われた。とにかく一反でも二反でも肯定側の再説明に重点をおくことにしたことが功を奏したのか、なんとか勝利することができた。コミュニケーション点は合計 17 点。

二試合目 肯定 慶応義塾高 A 0:1 開成高 否定

あくまで私的感想だが、この日一番の熱戦であつたと思う。慶應さんの肯定立論は「政策の安定による経済効果」と「外交の成果」を見込めるという二本立てのメリットで、長期政権ならそれが可能というものだった。こちらからの反駁は主に 3 点。①派閥は現在でも弱体であり、首相の権限はどんどん強くなっているからわざわざプランで権限強化する必要はない ②政策の安定に関して、長期政権が経済政策を打ち立ててもやはり支持率維持が大切で、中途半端なものになってしまう。アベノミクスもそうだった ③外交に関して、分裂政府になると首相が結んだ条約を議会が否決したりして、むしろプラン後にのみ起こる問題がでてくる慶應さんの返しも滑らかで、経済効果に関しては「少なくともロジックは残っている」状態だった。ただ開成の否定も残っており、Sh の二反でこれまた辛くも勝利を収めた。コミュニケーション点は合計 16 点。

はじめに	大会記	自由記事	付録
	019 秋大会 >		
	2019 冬大会 >		
	2020 DCS >		
	2020 秋大会 >		

三試合目 肯定 開成高 1：0 西高 否定

昼休みに、肯定立論の「政策体系」について少し話し合い理解が深まったのが良かった。おかげで筆者は「内因性の～について説明してください」という質問にも詰まらず答えられた。また質疑、一反共に否定立論の弱点を集中的につき、二反のNは試合を気持ちよくまとめてくれた。コミュニケーション点は全員が4で、合計20点。

決勝 肯定 創価高 3：0 開成高 否定

大まかな構成は慶應と同じく、経済効果&外交成果の二本柱だったが、経済効果についての資料の使い方がうまく、その結果テンプレで用意されていた否定一反が的外れなものになってしまった。肯定側は、経済についてはほぼ削られず、外交は元よりあまり評価されないというところだ。否定側は逆に、予算案否決は殆ど起こらなそう、赤字増大は現在のねじれ国会と違いが分からない、と言ったところで差分がつけられてしまった。コミュニケーション点は合計45点。勝敗についてはそれ以外にも資料の評価など私自身分かっていない部分も多いのだが、ジャッジの方のコメントを聞いてなるほどなと思ったことを一つ。曰く、自分たちは分かっている、それを前提にして話を進めたらジャッジには伝わらない、と。確かに思い当たる節はあり、だから後輩たちにはジャッジに愛されるディベートを心がけてほしいなと思った。

チームとしてはこんなところで、引退する高2の一人としては、最後に高2の4人でディベートをやれて最高に楽しかった。後輩たちにも、今まででも頭が上がらないくらい助けてもらってきたし、彼らがこれから部を引っ張っていくのを安心して任せられることは誇らしく思う。残りのn年間、どうか悔いのないようにディベート活動を楽しんでほしい。本当にありがとうございました。(文責：佐々木)

## ▷ 新型コロナ記事

### はじめに

昨今世間を騒がせる新型コロナウイルス感染症ですが、ディベートもその影響を大きく受けたものの一つです。その象徴はなんといってもディベート甲子園が初の中止になったことでしょう。ディベート甲子園とは今年第 25 回を迎えるはずだった中学高校の日本語ディベートの日本最大の大会であり、その中止は当然多くの中高生ディベーターにショックを与えました。しかし一方で、オンライン完結型のディベート大会の台頭など、ディベートの新たな可能性を探る機会ともなったことは間違いありません。ここでは、新型コロナウイルス感染症がどのようにディベートのあり方を変えたのか一高校生ディベーターの視点から書くこととします。

### 2019 までのシーズン

そもそもディベート自体マイナーな競技であり、普通の年でさえ何をやっているのか知らない方がほとんどでしょう。そこで、まずは 2019 年までの開成弁論部の一年の過ごし方を紹介します。

**3月初め** 中高ディベートのいわゆる「シーズン」はこの時から始まります。全国大会で扱う論題が発表され、選手たちは春大会に向けた準備を始めます。

**3月下旬** 関東甲信越地区の春大会が開催されます。論題が発表されてからの期間が短いのでどの学校も議論の完成度は低いです。しかし、この大会でどのような議論が強いのかといった感覚が掴めた学校は後に強くなっていきます。

**4～5月** この期間は公式大会は開かれませんが、練習会や論題勉強会が開かれることがあります。一見忙しくないように思えますが、開成では入学式、ボートレース、運動会など様々な行事が開かれるため意外と忙しい期間です。

**6月中旬** 第 1 回地区予選が開かれます。議論のレベルが段々と上がります。

**7月中旬** 第 2 回地区予選が開かれます。6 月予選から 1 カ月しかなく、また期末試験の後でもあり、その中でどれだけ議論の完成度を高めていけるかが鍵になります。

**8月上～中旬** 3 日間かけて全国大会が開かれます。だいたい東京で開催されますが、泊まり込んで 3 日間を戦います。各地区から強豪校が集まる議論のレベルがとても高い大会です。

**9月下旬** 開成学園で文化祭が開かれます。中 1 はこの文化祭で初めて他校のディベーターと試合をします。

**11月下旬** 秋大会が開かれます。この大会は資料を使わず短い日数で準備をする即興部門があることが特徴です。開成弁論部の高 2 はこの秋大会で引退します。

**1月上旬** 創価学園雄弁会によって冬大会が開かれます。

**2月** この期間は特に大会も無く、入試の影響で休みも多いためオフシーズンと呼ばれます。部内で大会が企画されることが多いです。

以上が一般的な年の 1 年の流れです。



## 2020 のシーズン

では、次に今年のシーズンがどのように変わったか紹介します。

2 月下旬 ディベート甲子園を主催する団体である NADE（全国教室ディベート連盟）から論題発表が延期になることが発表されました。

4 月 ディベート甲子園及びそれに付随する地区大会が中止されることが発表されました。

5 月 NADE によって「推薦図書館」という自粛期間中に読むべき本を紹介する企画が始められました。

8 月上旬「立論グランプリ」という立論を評価する大会の開催が発表されました。

8 月下旬 NADE 関東甲信越支部より、オンライン完結型の大会として秋大会が開催されることが発表されました。

3 月に部内で即興型の大会を行ったり有志の社会人や大学生によって非公式大会が開催されたりということはありませんでしたが、結局部として一つの公式戦に臨むといったことはありませんでした。普段の活動もオンラインで行うことが多く、対面での活動は少なかったです。

### オンライン型大会への移行

コロナ禍において対面でのディベート大会が開催できないため、オンラインでディベートの大会を開催する動きが広がっています。ディベート甲子園を主催する NADE の関東甲信越支部もオンラインで公式戦の秋大会を開催することを決定したことから、オンライン型のディベートという新たなディベートのスタイルが認められたと言って良いでしょう。このようにオンライン型の大会に移行できた理由に、競技ディベートの特徴が表れていると思います。

1 つ目の理由としては、声だけでできる競技だということです。ディベート甲子園のルールでも表などを用いて視覚的な要素を使ってスピーチすることは禁じられており、すごくシンプルな競技となっています。選手同士で接触する必要も無く、ジャッジに声さえ届けば試合が成立するため、オンラインでやるにはもってこいの競技ということです。

2 つ目の理由としては、ニッチな競技だということです。この文化祭で初めて競技ディベートの存在を知った方も多いと思います。競技ディベート普及のための様々な活動が行われてはいますが、まだまだ競技人口は少なく認知度も低い状態です。しかしそうであるがゆえに変化に対しても柔軟に対応することができたのではないのでしょうか。

最後の理由は、若い層が多いということです。ディベート甲子園は今年で 25 回目（を迎えるはずだった）とはいえまだまだ歴史の浅い競技です。そのため若いディベーターや指導者、ジャッジが多くオンラインでやることに対し抵抗が小さかったと感じました。特に大学生のディベーターが精力的に活動することで、オンライン型の大会が盛り上がっているように思います。また、中高年のディベーターの方でもオンライン型の大会にあまり抵抗がないようで（ここはディベートそのものというよりその界隈の特性だと思います）オンラインの大会関わってくださる方も多かったです。

## オンライン型大会とオフライン型大会

オンライン型大会に移行して実際に何が変わったの？ということを説明します。そもそもオンライン型、というものは Discord や zoom( や skype) といったオンラインで複数人が同士に通話しながら試合を行う大会のことです。もちろんこれによるメリットもデメリットもあるため、それを解説します(筆者の意見)。

まず挙げられるメリットとしてはもちろん、このようなコロナ禍のおいても簡単に大会ができることです。もちろん現状では特にこの特性が生かされていますが、通常時であっても試合会場を用意する手間など省けるため、大会の行きやすさという点ではオンラインに分があると言えます。

次に挙げられるメリットとしては、どこからでも試合に参加できるということです。オフライン型の大会だと一つの会場に集まる必要があるため、違う地区の方と試合できる機会は少ないです。しかし、オンラインでは全国どこからでも参加できる(外国からでも!)ため、様々な人と試合を行うことができます。

以上のように、とにかく試合をしたい!という人にとってはオンラインの方が便利であることは間違いありません。

しかし、もちろんデメリットもあります。一つにはオンラインの特性上不具合を防げないことでしょう。電子機器に不具合が発生してしまうと試合の進行が妨げられますし、使っているマイクや回線などによって聞き取りやすさが違うのはある意味で不公平とも言えるかもしれません。また、選手が何をしているかもわからないために、例えば試合中にチーム外の人からアドバイスをもらう、といったことも防げません。不正についてはまだそのようなことを聞いたことはありませんが、不具合についてはよく聞きます。

また、大会としての雰囲気失われることも挙げられます。オンラインになるとやはり臨場感や緊張感といったオフライン大会ならではの雰囲気が薄れるように感じます。ただ、この点については個人の好みが分かれる点だと思うので、デメリットだと言えるかはわかりません。

## おわりに

新型コロナウイルス感染症の影響で大きくディベートのあり方が変化しましたが、このようなオンライン化の流れは今年に入ってきたものではなく以前からディベートのあり方が変化していく流れはあり、それが急激に早まったように感じます。いずれにせよ今はまさにディベートが変化している時期であることは間違いありません。オンライン化によっても新たにディベートを始めるハードルが下がると思いますので、興味のある方は今この時期にディベートに関わってみるのをオススメします。



## ▷ 弁論部に入りました

~~~~~

僕が初めて弁論を知ったのは、5年生の時に行った開成の文化祭でした。その時の試合は開成対麻布の「制服を廃止すべきか否か」という論題でした。それまで僕が小学校でしていた討論とは違い、きちんと制限時間内でスムーズに自分の意見を言っていたのに驚き、憧れました。そのことがきっかけとなり、開成中に入学して弁論部に入りました。しかし、いきなりコロナ禍となり、部活はオンラインになりました。オンラインの部活では、先輩方の講座を受けて、ディベートについて、学びました。そして、部内戦や秋大会などで中一同士の仲もよくなりました。さて、僕の話もそろそろにして、凄くためになり、爆笑すること間違いなしの(はずの)大竹さんのお話に移りましょう!(文責:野下)

~~~~~

ディベートとの出会いと今思うことについて書きます。僕がディベートに出会ったのは今年の春頃だったと記憶しています。その頃僕は、いずれ始まるであろう学校生活を夢見て個人的に部活選びを始めていました。元々人前で話すこと、文章(主張)を考えて書くことが好きだった自分に「弁論部」という部活はあっているのではないか、もしかしたら楽しめるのではないかと、という期待がありました。そこで、学園HPの部活紹介を見たときに「ディベート甲子園」という文字があり、気になってYouTubeで過去の試合を見始めたことが出会いです。最初のころは、あまり人の話をしっかり聞けない(今は克服したはず)

僕には何を言っているかわかりませんでした。始めて「発生過程」や「〇〇新聞より始め」などの文言を聞き取れた時の感動は未だに覚えています。弁論部がどういうことをしているかは先輩方の記事で十分だと思うので、今僕が思うことについて書きます。果たして僕はあの時憧れたディベーターに近づけたのでしょうか?それは分かりませんが確実に言えることは弁論部生活をととても楽しんでいる、ということです。僕たちの代で優勝という栄冠を沢山手にすることを目指して、先輩や上手な人から沢山学んで、志高くこれから頑張っていきます。下手くそな文章でしたが、ここまで読んでくださってありがとうございました。(文責:大竹)

~~~~~

この記事は、開成中弁論部中1有志が、執筆したものです。ここまで読んでくれた方、ありがとうございました。

## ▷ Discordを語る

最近開成生の間で徐々に流行り、我々弁論部でも運用されているDiscordを語ります。

### Discord(ディスコード)とは?

簡単に言うとラインです。もともとゲーマー向けにスタートしたサービス。基本的には無料です。ラインと違ってボイスチャット(つまり音声通話)がやりやすいというのが特徴。

|      |     |           |    |
|------|-----|-----------|----|
| はじめに | 大会記 | 自由記事      | 付録 |
|      |     | 新型コロナ記事 > |    |
|      |     | 自由記事 >    |    |

## メリット

グループをまとめておける（資料用、大会用など）

他の人をグループから追い出せない（問題が起きにくい）

アプリを入れなくても使える（どの端末からでもブラウザで）

写真や資料のリンクに期限がない（ラインなら一週間で消える）

パソコンに強ければ何でもできる（自由度が高い）

こんなのがあげられます（ほかにもたくさんありますが）部活柄資料を word や PDF で送ることが多いので、ずっと残り続けるのはありがたい。（もちろん送信取り消しはできます）また、弁論部に入るとパソコンに強くなる人が多く、(仕事に必要なスキルは余裕でつく。動画編集ができる人も)いろいろなことができます。

## デメリット

やる気がない部員は見ない（弁論部は活動への参加自体緩い）

便利なのに知名度がない（ウイルスと勘違いされることも）

ブラウザでもできることが理解されない

## Fとは？

僕たちがディスコードを使うきっかけになったオンラインディベート団体。大学生から社会人まで幅広い年齢の人たちで構成されていて、ディスコードを使った大会などを主催。タイマーの BOT 試合会場の分岐まですべてこのサーバー（ラインのグループのようなもの）で完結。毎週日曜にラジオや社会人ディベーターによる試合などを行なっています。

## まとめ

ディベートなどオンラインで出来る部活にもおすすめです、部活のラインで制限時間を使いたくない人はディスコードの導入がおすすめです。ここまで読んでくださった方本当にありがとうございました。

（文責：田中）

## ▷ 弁論部あるある

ここでは、「弁論部あるある」と題し、認知度が低い弁論部について「でいべ君」（弁論部員）を中心とした会話形式で説明していきます。

弁論部といえば…

A「土曜の放課後みんなで遊びに行くんだけど、でいべは暇？」

でいべ「うーんと、僕は部活があるからいけない」

A「そういえばでいべって何部だっけ」

でいべ「弁論部」

A「へ～」

“マイナーなので反応が微妙”

|      |     |           |    |
|------|-----|-----------|----|
| はじめに | 大会記 | 自由記事      | 付録 |
|      |     | 新型コロナ記事 > |    |
|      |     | 自由記事 >    |    |

A「議論するの？」

でいべ「まあ…そんな感じ？」

B「じゃあ口喧嘩とか強そうだよな～怖え～」

“口げんかが強いと勘違いされがち”

C「じゃあ俺と議論しようぜ、テーマは…『Aは遊びに行かずに勉強すべき！』俺賛成派ね」

“口喧嘩好きと思われ突然よくわからないテーマについて議論が始まる”

別の日…

A「弁論部って、いつもどんな活動してるの？」

でいべ「学校でやるときは議論を詰めたり、資料の共有したりかな…試合したりもしてるね」

A「ふーん」

“やっぱり反応が微妙”

A「議論詰めるって具体的に何してるの？」

“こんなこと聞いてくる奴いるわけな、、、”

でいべ「ディベートって、立論っていう”最初の主張”みたいなのを両方が読んで、そのあとに決められた時間内で反論と、反論に対する再反論をしていくの。それをするうえで、どの主張が強いのかとか、この議論に対してはこの反論をしようとか、そういうことをしてる」

短い説明でしたがいかがでしたでしょうか

少しはディベートのことがわかっていただけると幸いです。

さらに詳しく

ディベートと一口に言っても、そこには様々な種類があります。僕たち開成弁論部が主に行っているのは、日本語（⇔英語）で、資料を用い（⇔用いない）、政策（⇔価値・事実）について論じ、メリットデメリットの比較により勝敗を決める、“教育ディベート”と言われるものの中の一部ですが、上にも挙げたように、さまざまな種類のディベートが存在します。

（文責：早川）

## ▷ 質問掲示板

### 質問コーナー～下級生から上級生に～

今年は感染症の影響もあって弁論部員が対面で集まる機会はとっても少ないです。そのため上級生でも下級生の名前 / 顔を全然覚えていません。これは問題ですね。

ということで、少しでも上級生と下級生の間のコミュニケーションを増やすためにということで下級生から質問を募集して上級生に答えてもらいました。それでは行ってみましょう、Here we go !!!

#### Q. 大会の日は緊張しますか？

A. 緊張しますね。でも試合中になると緊張は和らぎます。個人的には大会特有の緊張感大好きです。

すごく無難な質問ですね。この感じがいかにも中 1 っぽくて好きです。上級生の答えは最後の文から若干かつこつこつてる雰囲気を読み取れます。

#### Q. なんで弁論部入ったんですか？

A. 勧誘会が面白かったからです。

これまたすごく無難な質問です。絶対下級生が聞きたい答えじゃないですね、答える人間違ってます。ちなみに、勧誘会というのは開成の行事の一つでして、中 1 の 1 学期中間試験の最終日に各部活が自分たちの部についてプレゼンをした後、中 1 を引っ張って仮入部の名簿に名前を書かせる、というのが勧誘拐です。

Q. 資料を探すときにページ数がかかなり多い本や PDF を見つけたときは目次を見てありそうな部分だけ見るのか一応全部読むのか知りたいです。

A. ケースバイケースですね。自分は他の部分が使えなさそうだったら普通に読み飛ばします。ただ、論題と直接の関係は無くても周辺知識として蓄える場合があります。ここら辺の判断は難しいですが、少なくとも全部読む必要はありません。

この質問回答は非常に弁論部らしいですね。質問も良いこと聞いてますし、答えもちゃんとしてます。この「資料」というのはディベートの特徴（使わないディベートもありますが）でして、本・論文・新聞・ネット記事・雑誌 etc. から自分たちの主張を裏付ける根拠を探すものです。この質問に上がっているように、時には何百ページにも及ぶ論文だったり、本だったりを読むことになり、非常に大変な作業です。

#### Q. 一人でできる二反の練習は何かありますか？

A. 原稿を書いてみる or 試合展開を考えてスピーチしてみる。要はイメトレです。何の役に立つの？と思われるかもしれませんが、まとめ方のイメージだったり言い回しだったり身につきます。二反に限りませんが、試合後に時間を取って自分のスピーチを完璧な内容に変えて時間を測って読むのはとてもいい練習です。やらない人が多いだけにこれはホントにオススメです。

これも下級生の初々しさがあつた弁論部らしい質問です。「二反」というのはディベートの最後のポジションで自由度が高いだけに練習が難しいですね。

Q. 運動会で一番面白い競技はなんですか？

A. 要領次第です。集団戦と比べて少人数が注目を浴びることができるうえにエンターテインメント性がある緊張抜きに楽しめるので良いのではないのでしょうか。中学生の間しかできないので是非経験してみてください。

これはすごく開成らしい質問ですね。開成の最大の行事と言っても過言ではない運動会、今年は感染症の影響でなくなっていました。今年初めての運動会をするはずだった中1は非常に可哀想ですが、その分来年以降楽しんで欲しいです。

Q. 先輩の試験対策方法を教えてください。考查が怖い。。。。

A. 良い方法が2つあります。1つは、事前に試験までのスケジュールを立てて、授業をしっかり聞き、授業中にある程度理解する方法です。でも、今からじゃこの方法間に合いませんね。そこで即効性のあるもう1つの方法をオススメします。それは、成績悪くても死にはしないと思うことです。

遍く学生は試験が怖いものです。質問は下級生っぽいし答えは上級生っぽいですね。中1や中2の頃は試験でちょっとでも良い点を!って思っていたのに学年が上がるにつれ赤点さえ取らなければ(赤点取っても進級できれば)問題ないと思うようになってしまうのはなんでなんですかね... 大学受験は近づいているはずなのに。あとこの答えアメリカンジョークを和訳したみたいな文章ですね。

Q. Kって採用したら即座に勝敗が決まるじゃないですか。もし両サイドが言語Kを提出して、「相手には投票しちゃダメ」って主張が両方認められたらどうなるんですかね。実際にあったらAffが論題の肯定に失敗したってことでNeg voteが妥当なんでしょうけど、なんかモヤモヤします。

A. 詳しくないからわからないんですけど、クリティークは採用したら即勝敗決まるんですかね。お互いが違う枠組みで議論している時(一方のみKや両方Kでも違う枠組みのKの場合)は枠組みの採用が勝敗に直結するのはわかるんですが、両方同じ枠組みのKの時はその枠組みの中での議論があるんじゃないでしょうか(間違ってる可能性高)。例えば、言語Kならばそれが社会に与える影響の大きさなどを比較して投票がなされるのでは。

読んでて意味分からなかったと思いますが、僕も意味わかりません。ちなみに高校生のディベートの範疇超えてます。いや~こんな質問ができる中1中2がいるなんてさすが開成ですね(ちなみに質問は匿名で学年無記入)。

Q. 文準とかの仕事や部活と勉強をどう両立させていますか？(時間の取り方など)

A. 徒歩つうが...寝る間を惜しんで頑張ってます

これも開成生活に関する質問ですね。「文準」というのは「文化祭準備委員会」の略でして、こうしてオンラインで文化祭の企画を行うことができるのも彼らのおかげです。「徒歩通が・・・」っていうのは何を言いかけたんでしょうか。各地から厳しい受験を勝ち抜いた生徒ばかりの開成にまさか「近所にあったから」という理由で入学して徒歩で通ってるみたいな生徒がいるはずはないでしょう。

はじめに

大会記

自由記事

付録

質問掲示板 >

先輩と語る質疑 >

先輩と語る一反 >

Q. 正直弁論部の野球ファンの多さに最初驚きましたか？（僕は驚きました。監督を始めとする熱狂的なファンの多さに）

A. 何話してるのか分からなくて逆に驚かなかったなあ

これも完全に答える人間違えてますね。野球ファンが多いというのは弁論部の特徴で、様々な球団のファンが野球トークで盛り上がっています。ちなみに弁論部の監督は巨人ファンです。

Q. 僕は今のところ今までに書いたフローを全て貯めてます。先輩は貯めてますか？

A. 全て取っておくのは現実的に無理ですが、大事な試合の分は取っておくと後で見直して懐かしいです。フローを取るときに余白に必ず年度と大会名などは書くようにしています。

フローというのはディベートのスピーチのメモのことです。字が綺麗な人のフローは他校の議論などの情報共有に役立つので重宝されます。

Q. 鼻詰まりや喉のケアなどは日頃から行ってますか？また、行っているとしたら何をしていますか？

A. 自分は鼻づまりや喉が壊れることはほとんどないので特にはやってないですね。どちらかという口舌環境にはちょっと気を使います。リップクリーム塗ったり口内炎の薬塗ったりとかですね。

ディベートにおいてやはり声というのは大事です。ディベート甲子園のルールでも視覚的に証拠資料を提示することはできないと書かれており、声だけで戦うというのもディベートの特徴といえます。

以上が質問コーナーでした！早く対面で気軽に質問が受けられる状況になって欲しいですね～。それでは！

## ▷ 先輩と語る質疑

泉原「よろしくお願いします」

平山「よろしく」

泉「今回は高2の平山先輩に質疑について聞いていくんですけど、初めに、質疑とはどういう立ち位置のポジションですか」

平「難しいこと言うね。質疑の役割は2つあると思っていて、一つは議論の中で認識のずれが起きるのを防ぐ。わかりやすい話で言えば、用語の意味とかプランの確認とか、何をそもそも問題としているかを、肯定側、否定側とジャッジの三人で認識を揃えるということが一つ。もう一つは、反駁につなげるためにそういうところを確認していくという感じかな」

泉「反駁につなげるというところですが、質疑に出来ることと出来ないことがあると思います。一反との違いみたいな感じで教えてもらえますか」

平「質疑っていうのは、ジャッジの思考を直接変えることはできないと思っていて。質疑にできるのはジャッジに疑問符を浮かばせるところまでで、反駁にできるのがジャッジの意見を変えさせるところまでと思っている」

泉「なるほど。それはわかりやすいですね。それを踏まえてなんですが、いい質疑とはどういう質疑を指しますか」

平「前提としてきちんと会話がなりたっていることが一番大事で、応答ももちろん大事だけど、きちんと会話が成立していること、何を聞いているかがはっきりした質問をして、それに対して普通に答えるという状況を作ることが一番大事。二つ目が質疑側が話をリードするってことで、極力 Yes / No で答えられる質問をした方が良くて、もっと言うなら、応答にはひたすら「はいはいはい」と言わせたい。で、何か確認して「はい、そうですね」「じゃこれはこういうことだからこうでこういうことなんですか」みたいな感じで質疑がリードする。必要によっては何でこういう質疑をするのかとか、議論の流れを質疑側から確認する。例えば、このデメリットはどうやって発生するんですかみたいな話は」

泉「Yes / No で答えられない。。。」

平「そう。自分たちからこういうふうで合ってますか的な聞き方をする、ってわかる？」

泉「クローズドクエスチョンですね」

平「どういう事ですかって聞くんじゃなくて、こっちから説明して、「そうです」と答えさせる。そういうのがいい質疑」

泉「なるほど。じゃあ、どちらかと言ったら応答者がずっと喋っているよりは質疑者がずっと喋っているみたいな方がいいんですかね」

平「うん、そう」

泉「なるほど。あと、さっき言っていた反駁につながる質疑がいいとされているという話ですが、何か特徴があったり、こうするとよりやすいみたいなことはありますか」

平「当然、質疑の人が自分たちの議論に参加したいというか、質疑が議論をリードするくらいのつもりでいていいと思っていて。最終的に自分たちがどこを伸ばして、相手のどこの筋を切って、その為にはどうい



反駁をして、どういうブロックをして、そのためにはどこを質疑で訊くのか。最終的にどこを残してどこを切りたいのかを明確にした質疑をするのが前提。それを意識するかな」

泉「なるほど」

平「質疑にできること、できないことという話をさっきしたけど、中一中二杯を見ていて、質疑がやっつてことで気になっているところがあって、質疑はジャッジに「はてな」を浮かばせることしかできなくて、ジャッジの思考を狭めることはできるんだけど、決めつけることはできないんだよ。質疑で相手が応答に困ることがあるけど、その時に、例えば「被害者が沢山いるみたいな証明ありましたか？」みたいな質疑をして相手が黙った時に「じゃあ被害者は少ないってことですね」っていうようなことを言う人いると思うけど、それはやる意味なくて、むしろ心証が悪くなるだけで、多いっていう証明がなかったからと言って少ないかどうかは質疑の段階でははっきりしないわけだから、「じゃあ少ないってことですね」と畳みかけるのは間違ってると思うてる。」

泉「そうですね。相手が困ってるというところで止めておいて、後は一反につなげるみたいな」

平「そうそうそう」

泉「確かに、上手い質疑者は「質疑の分際をわきまえてる」というか、無理して迫ろうとしないというところがありますよね。そこを引き出せないのであれば一反で言うからいいですみたいな感じで」

平「うん、そうね。応答者が分かってないならそれはいくら話しても仕方ないから、そこは反駁でやるしかない感じ」

泉「ありがとうございます。で、そこの反駁につながるというところで、質疑は他のポジションとの連携が大事になってくると思うんですけど、一反や二反の担当者から指示をして欲しいと思っていますか？」

平「えっと、指示をする、してもらおうというより、自分のチームがやっている感じだと、プレパの段階から相手のこういう議論が来たらどうするかってことをあらかじめ決めておいて、それに基づいて自分で判断することが多いかな。試合中に一反の人から、自分の質疑でここを聞いてみたいに指示をされることはまず無い」

泉「あー。そこで指示を受けるのは多分そもそもチームとして共有ができてないということなんですかね。試合中に聞いちゃうっていうのは」

平「そう。それ以前に共有しとこうみたいな感じ」

泉「なるほど。じゃ試合中は指示は極力ないのが望ましいってことですね」

平「うん。試合中は質疑の人から「ここを聞くけどそれでいい？」くらいでいいと思う」

泉「なるほど。逆に提案するという感じですね」

平「そう」

泉「ありがとうございます。質問を変えるんですけど、質疑で難しいことの一つに聞き方があると思うんですけど」

平「それって、質問を聞く方かそれとも話を聞く方かどっち？」

泉「質問ですね。さっきクローズドクエスチョンという話もでたんですけど、それ以外に工夫していることとかありますか？」

平「うーん、ジャッジに伝わるような質疑、自分がなんでこういう質疑をしているかジャッジがきちんとわ

かるような質疑をすることかな」

泉「具体的にどうするとかありますか」

平「ジャッジにここを反駁するよみたいに予告する感じかな。具体例がないと説明しにくいけど」

泉「そうですね。反駁につながりそうな顔している質疑ってことですか」

平「まあそうかな。例えば反駁で発生過程をひたすらつくんだったら発生過程か発生過程のリンクにしか質問しないし、そんな感じかな」

泉「なるほど。ありがとうございます。で、その聞き方とか、いい質疑を効率的にする方法の一つとして質疑テンプレがあると思うんですけど、これについてはどう思われますか」

平「昔は作っていたけど、さっきからずっと話していたように、例えば何か単発の質問をしてそれに対してこう答えるみたいな、質疑にもちゃんと流れがあると思っていて。だから普通の人を書くテンプレっていうのは、テンプレに難易性、解決性、重要性って書いて、難易性のこういう内容に対してこう聞く、重要性のこういう内容に対してこう聞くって書いていると思うんだけど、それよりは話の議論、相手がこういう議論できたら、こういう議論で質疑をするんだみたいな、質疑のモデルのようなものを書いた方が僕はいいと思ってる。その方が反駁でどこを残すとかわかりやすいから」

泉「その質疑のモデルですけど、例えばどういう感じでやるんですかね」

平「本当にしっかり書く時は、「始めます」から「はいお願いします」とか書いて、「まずここに聞くんですけど、ここは何ですか」って聞いて、相手の想定する応答とかも書きちゃうかな。それを音読して、時間内に収まるか試したり。あまりそれはしないけど」

泉「じゃあ結構本番そのままぐらいの気持ちで。。。」

平「うん、そう」

泉「一個一個の質問を単発で書くんじゃなくて、スピーチを用意するみたいな」

平「うん。そう。そっち」

泉「ありがとうございます。また質問変えて、質疑の準備って、立論を読まれてる時間と準備時間の二つがあると思うんですけど、それぞれどうやって使ってますか」

平「さっき散々事前に考えてこいと言ったけど、勿論事前に考えられない相手の議論、予想外の議論もあるわけで。ただ、予想外の議論というのは大筋から外れているので、そういう議論ってこっちに準備ができていないだけで、きちんと戦えば大して強くない。所詮邪道というか、猫だましみたいなものだから。奇策みたいにやってもきちんと戦えば勝てる。例えば陰謀論とかって真面目に考えれば穴がある。この資料の証明はおかしいんじゃないかとかこのリンクは怪しいとかがあはずで。メリットや立論を聞いて、これでいいよねと判断して、前に考えてたこの質疑をするんだなと頭に思い浮かべる。それとは別に、この話はおかしいからここを聞く、みたいに、立論を聞きながらどんどん変えて。立論を聞き終わったらどこ聞くかほぼ確定させておいて、準備時間になったらチームの人にこういう事を聞くよとか、こう聞こうみたいなことを頭の中でもう一度確認する感じで。何を聞か決める作業は立論を聞きながらほぼ終わらせてる感じ」

泉「準備時間が始まった時にはだいたいフローに書いてある感じですかね。それで準備時間になったらチームの人と共有したり予行演習をしたりみたいな。慣れてくると立論を聞いている間に準備が終わっちゃうみたいな感じですね」

平「うん。相手の議論の穴とかリンクが切れてるところは、なるべく立論を聞いて即座に「はてな」が自分の中に浮かぶくらいにはなった方がいいと思う。」

泉「そこですけど、質疑には相手の議論の穴を見つけるとかリンクが怪しいところを見つけるとか、そういう能力が結構大事になってくるとと思いますが、練習方法ってありますか」

平「例えばこのターンの議論は強くて崩れないなとか、何かの議論が強くて崩れないなとか、普段からリンクを意識するとか、どう反駁するか意識として。。。いい例が浮かばないな。。。ある議論に対してそのまま反駁するんじゃなくてリンクを切りに行く方を考えると、例えばある議論に対してエビデンス一枚使って反駁するよりもリンク切れるなら切っちゃった方が勿論早い。」

泉「そうですね。早いし強いですね」

平「そう。だから、特に強い議論、普通に反駁したら中々切れない議論に対しては、なるべくリンクを切りに行くことを意識する。例えば、解決性が強くて、難易性もあって、難易性と解決性へのリンクがしっかり立ってるとしても、難易性を削ってその削った部分が解決性とリンクしているのだとしたら、もう難易性と解決性のリンクが切れてるみたいなことかな」

泉「ああなるほど。そうですね」

平「要は普段から意識することかな。これは自分の立論を書く時もそうで、重要性で言ってることを難易性で証明してなくね？みたいなことをきちんと自分から考えるとかな」

泉「重要性でこれだけ言ってるけど、その中で難易性とリンクしている部分はここだけだ、みたいな。」

平「そう」

泉「リンクを意識するのは重要ですね。あとは、試合中に相手が黙っちゃうとか、困っちゃうみたいなことが結構あると思います。そういう場合ぱっと次にいくというのもあると思いますが、表現を変えるという方法もあると思います。そこの兼ね合い、判断にはどういう基準がありますか」

平「相手が黙る理由には二つあると思っていて、一つはこちらの質問を理解してもらえなかった時。もう一つは相手が立論を理解してない場合。相手が立論を理解してない場合というのはどんな聞き方をしてもそれは相手が答えられないわけだから、相手が立論をわかってないと判断したらその論点は諦める。質問の仕方が伝わってない場合は、最大限ジャッジには伝わるようにする前提で、言い方を変える。立論はわかっているけど質問を理解していないという理由で相手が黙ってるのであれば言い方を変えて、具体的には、何でそういう質疑をしているのかとか、前提にどういう情報がとか、なんでこういう質問しているかっていう、難易性でこう言ったのに解決性でこうじゃないかみたいなどころまできちんと説明して質疑するかな」

泉「ありがとうございます。今までのところが質疑一般についてで、次は平山さんの質疑というところをうかがいたいと思いますまず、印象に残っている試合を教えてくださいませんか」

平「それは自分のプレイが？それともチームが？」

泉「えーと、どちらでもいいですけど、なるべくご自分で質疑をされている試合がいいです」

平「いい試合じゃなかったし、自分も良くなかったから、あまり思い出したくないけど、自分が全国決勝に行った時の準決勝かな。」

泉「禁煙ですよ」

平「何で印象に残っているかという、自分が元々したかった質疑が全部できたことと、全部言いきれて余

計なことも聞かずにできたみたいな感じかな」

泉「その議論について詳しく教えていただけますか」

平「こちらがシガーバーの営業の話をして、相手が普通の健康なんだけど、相手の重要性で公共の場所だと受動喫煙が起きちゃいけないんだみたいな話で、二対一で公共の場所って何ですかみたいなことを聞いて。なぜ聞いたかという、シガーバーというのは飲食店だけど公共の場所ではなくて、タバコが好きな人しかいないんだから受動喫煙の被害を守る必要はないでしょうという話をしたかった。それで公共の場所とはどういう場所をイメージしているかを聞いたり」

泉「相手の応答はどんな感じでしたか」

平「不特定多数の人が集まる場所と言っていました」

泉「ああそうでした。それで、タバコを吸う人だけだったら公共の場所って言えるんですかみたいな感じだったでしょうか」

平「それは多分聞いてないと思う。それは二反で回収するぐらい。二反で、そもそも肯定側が問題にしているように公共の場にシガーバーは含まれないから、例えば接待とかでシガーバーに行くことはあり得ないし、タバコ好きな人しか集まらないんだから公共の場所ではなくて、ここを規制するのは過剰規制なんだみたいな話を二反でしたと思うので、そっちにつなげる感じで特にそれ以上は聞かなかったと思う」

泉「この公共の場所ってなに？という質疑は、最初の質疑の二つの役割をどっちもカバーしているような気がします。公共の場所ってなにというそもそもの認識をすり合わせておくのと、さらに否定側の主張につながるというか。一つの質疑で多面的ないい質問ですね」

平「なるほど。あと、もう一つ質問をした。反駁で家庭での受動喫煙が増えるみたいな話をしていて、肯定側が重要性で、子どもや高齢者とか社会的弱者を守らなくちゃいけないみたいな話をしていたんだよ。で、そこのところを確認した。ここは素直に、子どもとか社会的に弱い立場の人で自分の意志で自分の行動を決められない人っていうのは受動喫煙の被害から守らなくちゃいけないんですよね、みたいに割とストレートに聞いた覚えがある」

泉「で、相手に「はい」って言わせて次行くみたいな」

平「そう」

泉「ありがとうございます。準決勝結構見てるはずなんですが、結構忘れてました」

平「あまり見なくていいと思う、あれは笑」

泉「質疑に限らないのですが、高校生、大学生、社会人で参考にしているディベーターはいますか」

平「園山さんと渋幕の加藤君。加藤君の質疑は YouTube にあるから絶対見た方がいい。あと開成の佐藤さん」

泉「加藤さんの質疑は中学の時のエキシビジョンマッチとかも上がってて結構面白いですよ。サムネに加藤さんが映ってた気がする」

平「あるね。映ってるかもしれない」泉「昨日佐藤さんにインタビューしたんですが、佐藤さんも園山さんの名前を挙げていました。どういうところが上手いと思いますか」

平「えーと、雰囲気を作るところ。議論の雰囲気で相手の主張が怪しいと思わせるところが上手いと思う」

泉「そうですね。JDA

の死刑廃止の質疑で、園山さんが肯定側だったんですが、否定側の第一立論に対して、否定側では死刑を廃

止することによって殺人とか凶悪犯罪が増えるんだって主張をしていて、そこに統計データを持ってきてたんですよ。ただそれは死刑廃止前後で数がどうなったかという生の数字で、園山さんはそこに対して死刑廃止以外の要素を排除したような分析ではないですよねというところで終わらせてるんですよ。そこだけ聞いて次に行くみたいな感じで。結局、肯定側からの反駁で他の要因を排除した研究を出して比較するっていう、優位性をつけるみたいな感じで試合で使ってたんですけど」

平「園山さん、ああはいそうですねそうですねわかりましたみたいな感じで早口で、英訳すると Yes の内容を早口で言って話題を切る感じでしょう」

泉「そうですね。雰囲気をつくるというの確かにありますね」

平「うん。あと名前がちよっと出てこないけど聖光の質疑の人も上手いと思う」

泉「そうですね。このインタビューの初めの方で「上手い質疑は質疑の分際をわきまえてる」みたいなことを言ったと思うんですが、この表現は聖光の彼をイメージしています」

平「ああ彼上手いよね」

泉「相手にぼろを出させようとしてなくて、そんなに拘らずにパツと次に行けるとか、色々上手いですよね」

平「立論をきちんと理解しているから答えやすいよね」

泉「確かにそうですね。あと、渋幕の加藤さんにはどういう上手さがありますか」

平「前に話したけど、相手にひたすら「はい」と言わせるのがいい質疑だと思ってるけど、加藤君はそれが上手いと思う」

泉「確かに。Yes って言わせるハードルを下げるような聞き方なんですかね」

平「段々ハードルを上げていくっていうか。ここでこういう事言っていましたよね、あと、ここでこういう事言っていましたよね、てことはこういう事ですよねみたいな感じ」

泉「認めざるを得ないみたいな感じ。。。」

平「そう」

泉「確かにそうなんですよね。ありがとうございます。質問は以上です。これは大体読中二中三を対象にしているんですけど、平山さんから中二中三にメッセージとかアドバイスがあればお願いします」

平「特に中三に一つ言いたいのは、クリティークとかトピカリティとかそういうところを気にするのはまだ早いから、きちんと自分の言葉で説明する練習とかになるべく力を割いてくれた方が部として今後強くなってくんじゃないかなということが特に中三に対して。あともう一つは、前にも言ったけど、チームとしてどこの議論を残してどこの議論を切っていくのかということを中心に方針を決めてからディベートに臨んで欲しいなということ」

泉「方針を決めておくと。ありがとうございます。大体以上ですが大丈夫ですか」

平「うん、大丈夫だよ」

泉「ありがとうございました」



## ▷ 先輩と語る一反

泉原「ということで、今回は高1の西野先輩に一反について語っていただきます。よろしくお願いします」

西野「お願いします」

泉「西野さんは一反に限らず、二〇一九年秋の中学では立論でベストディベーター賞、二〇二〇年冬ではベスト二反賞と幅広い活躍をされています。まあ今注目のディベーターですね↑」

泉「まず一反について一般的なところからお聞きするんですけど、一反というのはどのような立ち位置のポジションだと思っていますか？」

西「うーん、どのような立ち位置って言われると一言では難しいんだけど、立論・質疑・一反・二反みたいな感じで四つと考えると、起承転結の転なのかな、って思います」

泉「立論と質疑で一つのフェーズが終わって、そこから転じていくみたいな感じですかね」

西「まあ、そんな感じだと思います」

泉「ありがとうございます。それで、一反っていうのは他のポジションとの連携がすごく大事になると思うんですけど」

西「そうですね」

泉「個人的には質疑とか二反に積極的に指示を出したい派ですか？」

西「指示を積極的に出したい派かって言われると、それはちょっとなんか、指示を出すのはどちらかと言うと二反かなっていう風に思ってた。確かに一反も連携は大事になるんだけど、んーまあ指示出すかって言われたら。。。理想としては指示出さずにそれぞれがやるべきことやるみたいなのが理想だと思うので。『このポジションが指示を出す』みたいに決めてやるのはあんまり良くないかなって思います」

泉「なるほど。じゃあもう一つなんですけど、自分に対して周囲から指示を出してほしいと思いますか？」

西「一反としてってことですか」

泉「はい」

西「指示を出してもらうという考え方はあまり良くないと思っていて、なんでかっていうと、指示出してもらって、それをちゃんと理解して一反できるかっていうのがイマイチで。例えば、指示出すにしても仲間が『あの⑩の反駁打とうね』みたいな、それはまだいいと思うんだけど、予想してこなかった立論が来て、『こういう反駁して』って一反として言われたとしても即座にそれを理解するのは難しいし。で、指示出すっていうとどちらかといえば一反を担当している側が他の担当者に『この論点に対してはこういう反駁を考えているんだけどどうですか』みたいな。一反の人が反駁考えてそれに対する回答をもらったりっていう形式にしたほうがいいんじゃないかな」

泉「ありがとうございます。準備時間の中ですぐに理解するのは難しいから自分で考えるべきなんですね」

泉「次の質問なんですけど、準備時間の使い方についてです。肯定一反はアタックとブロックがありますが、直前の2分は何に当てていますか？」

西「自分は直前の2分に何かするということはある程度なくて。まずアタックは否定側立論読まれてから質疑の時間だったり準備時間だったりってところでいろいろ考えたり。で、ブロックは否定一反の間に大体自分のフローにこういう再反駁すればいいかなって書き起こして。直前の2分はどんな順番で言うかとか



反駁の予行演習とかそっちに当てていますね」

泉「なるほど。アタックはみんな立論を読まれた段階で考えると思うんですけど、ブロックは否定一反の中で考えるんですね」

西「まあそうですね」

泉「直前の2分は予行演習というのは自分にないところなので参考になります。」

泉「続いて、一反っていうのは二反とのすみわけが出来ていないと、一反と二反で重複した内容を喋ってしまってもったいないみたいなことが、特に中学とかであると思うんですけど」

西「あー。そうだね」

泉「そういうことについて気をつけていることがあったりしますか」

西「どちらかって言うと一反と二反の内容が被るっていうのは二反側の責任が大きいとは思うんだけど、一反としてそれをやらないために何に気をつけたらいいかって言うと、例えば二反段階でも立論を引っ張ってきて処理できる、とかなら（そういうことは）あんまりやらずに、一反の良いところとして例えば資料を読んだりとか立論を引っ張るだけじゃ返せないようなところをしっかりと打つことができるから。最悪二反でもできるかもってことはあんまりしない方がいいと思います」

泉「そういう立論を伸ばして再反駁するっていうのはレイトにはならないんですか？」

西「二反でってことですか」

泉「はい」

西「それは本当に程度によるから一概には言えないんだけど、別に二反でレイトっぽいこと言ったとしても指摘がなかったりとか自然な感じで、言い回し的に大丈夫ってこともあるので。割と二反でなんとかかなるかな、って気がします」

泉「なるほど。じゃあこれ僕からの最後の質問になるんですけど、今までの中で最も印象に残っている試合について教えてください」

西「ええ、一反をやってってことですか？（←無茶振りすみません）」

泉「まあ、出来ればそれが望ましいんですけど、、、」

西「えっと、今までで実を言うと一番印象に残っている試合は一昨年の... 二〇一八年のゴールデンウィークの練習試合なんですけど」

泉「禁煙（論題）ですか」

西「禁煙です」

西「それで肯定一反をやっていたんですけど。その時に本当に肯定一反って忙しくて色々やんなきゃっていうので、物凄く準備時間の間に焦ってしまい... それでタイマーを持っていくのを忘れてしまって大爆死したのが一番記憶に残ってます」

泉「あ、爆死したんですね」

西「はい。爆死しました」

泉「禁煙論題の肯定一反は大変ですよ。全国決勝とかでも中島さんがかなりきつそうでしたし」

西「そうだね」

泉「ちなみにその爆死した試合の対戦相手はどこだったんですか？」

西「対戦相手は、覚えてないんだけど どこだったっけな」

泉「とにかくパンクしちゃったと」

西「パンクしちゃいました」

泉「それは、ブロックが多かった感じですか？」

西「んー、ブロックが多かったっていうより。準備時間に焦ったこととしては、アタックの選別でどれ打てばいいんだみたいな。色々立論に対して打てるやつはあると思うんだけど、その中でどれを選べばいいんだっていうのがイマイチつかめずにいて。それでずっと焦ってて、気づいたら準備時間が終わってた、みたいな」

泉「アタックは相手の立論を聞いたときから考えると思うんですけど、それでもキツかったみたいな感じですか」

西「それでもって言うか、そもそもその時の自分が一発で立論聞いて『あ、これだ』みたいに準備できなかったっていうのと、単純にもう焦りが焦りを呼ぶ、負のスパイラルに陥って」

泉「そのときに、周りのサポートとかってどうでしたか」

西「周りのサポートっていうと、それはさっき言ったように周りからアドバイスしてもらうとかだと思うんだけど。焦ってる状況だから余計に、どういう反駁してほしいのってことが理解できなくて。まあ、そうになりました」

泉「ありがとうございます。じゃあ結構ほろ苦い試合なんですね」

西「まあそうですね。それで判定だけ見たら勝ってたという謎の試合だったので」

泉「なんだかんだ返してたし反駁刺さってたんじゃないですか」

西「いや、普通に考えて負け試合だったと思うんだけど、何だったっけな。なぜか、勝ってました」

泉「タイマーを忘れた、ということだったんですけど、タイマーを忘れてそのままやったんですか？」

西「タイマーを忘れて、そのままやって、で結局見つからず。スピーチしている間も頑張ってたんですけど見つからずで」

泉「なるほど。じゃあ紙をいっぱい持っていったんですかね」

西「まあそうなるかもしれないですね」

泉「結局、時間は計らずにとりあえずやったんですね」

西「とりあえずやって。それで爆死しました」

泉「僕も、2020 冬の二反でタイマーを押し忘れて。開始 10 秒くらいずっと押そうとしてたんですけどなぜか押せなくて。それでタイムキーパーのタイマーをチラ見しながらやった記憶があります」

西「すごいな」

泉「タイムキーパーが前の方にいてよかったです」

泉「はい、ということで僕が用意してきた質問は以上です。ここからは中 2 中 3 に募集したお便りを読んでいくんですけど」

泉「まず 1 つ目は、東京都在住匿名泉原さんからのお便りです。『有効なダウトとそうでないダウトの違いを教えてください』とのことでした」

西「それぞれに特徴があると言うより、やっぱりさっき言ったように、試合の中で落としどころって二反で。逆算するっていうか二反に繋がるような一反をできることが理想だと思っていて。だから例えば二反として

『こ

っちはデータで発生量示してるけど相手は示してないよね』みたいな感じに持っていきたいんだったら一反段階でそこを強調して、『相手はどれくらい発生するのかを示していませんでした』みたいにやったらそれは有効なダウトになると思うし。そうじゃなく、ただ言うだけだったら無効なんじゃないかって思います」

泉「結局二反で使えるかってことなんですネ」

西「そう思います」

泉「ありがとうございます。続いては東京都在住匿名泉原さんのお便りです。『テンプレを作る際、いつも反駁の四拍子目で困ってしまいます。オススめの表現があれば教えてください』とのことです」

西「確か四拍子目みたいなのは竹久さんのブログに書いてあったと思うんですけど」

泉「はい、ありますね」

西「まあ個人的に四拍子っていうのが最近あんまり気に入らなくなってきてしまっていて」

泉「というのはどういうことですか」

西「割と最近、テンプレとか用意せずに資料だけ用意したりその場で考えて即興で一反するみたいなことが、えっとなんだっけ…」

泉「コロナ撲滅杯ですかね」

西「コロナ撲滅杯もそうだし最近やった、、なんだっけネット・ゲーム香川の」

泉「あー。あの九州のやつですね」

西「そうそう。あれでもそんな感じでやってて。自分でもどういうふうに反駁の四拍子目言ってたかわかんないけど、割と四拍子目って意識するよりは反駁やってたら自然に結論として出すよね、みたいなのが口から出るから、、それでテンプレやるのがあんまり好きじゃなくなってます」

泉「じゃあ、もうテンプレ離れをしたって感じですか」

西「まあ、そんな感じじゃないですかね」

泉「レベルが違うなあ。ありがとうございます。続いて、、もうなんか東京都在住とかいう茶番がめんどくさくなったので質問から行きます。『肯定側第一反駁の時間配分が難しいです。例えば残り時間が設定していた時間になったら、アタックを切り上げてでもブロックに移った方が良いでしょうか』」

西「あー。なるほどねえ。うん、これ難しいけど、どうなんだろうね。最近はさっき言ったようにテンプレ離れもそうだけど、なんとなく、一反を長いこと、長いことっていても8年とかそんなわけじゃないけど。意味わかんなかったわ今の。なんとなく、やってると時間が大体これくらいになるなってわかってきたりするんで、そうになったら時間配分がどうかあんまり気にしてないんですけど。んー。時間配分が難しいってときは、なんだろう。なんだろうなあ。まあ切り上げてもいいと思います」

泉「これは試合によるところがあるかもしれないですね」

西「そうだね。あと切り上げていった方がいい理由としては、この場合は反駁を優先度順に打つてるとすると、優先度高いのが言えてるんだったらそこで勝ち拾いに行けるし。アタック9ブロック1とかだと自分の立論が削られすぎてやばいってなるから。ちょうどいいバランスを保つためには時間で区切ってやれば、後は二反なんとかしてくれるって考えで。一反完ぺきにこなそうとするとめっちゃくちゃ難しいので。割と二反任せでいいと思います」

泉「勝ち筋を最低限残していれば、大丈夫ってことですね。完ペキじゃなくても」

西「そうそう、そうだと思います」

泉「なるほど。ここは臨機応変に対応するのがけっこう難しいんですけど、そういう判断基準があればやりやすいですね。続いて、『去年の秋大会における否定一反のような、ストーリー性のある一反に憧れます。そのようなアタックをするには、どんなリサーチをすればいいですか』

西「去年の秋大会っていうのは…」

泉「タクシーですね」

西「ストーリー性って言っても、反駁の資料の中で1つの物語ができてるとかじゃなくて、ストーリー性って言葉が割と曖昧だと思っていて。どういう意味かよく掴めないんだけど、一番ストーリー性としてダメなのが、例えば僕が去年の春大会でやってたような、とりあえず打ちまくるみたいな、ああいうのがダメで。なんでかっていうと二反が落としどころっていうふうに考えると、たくさん打ったところで使える反駁と使えない反駁が出てくるはずだから。二反で『ここを伸ばしてここで勝つ』っていうのがあるはずだから、ストーリー性って言っても一反だけじゃなくて試合全体になってくるのかなって思ってた」

泉「試合全体としてチームで世界観を持っておいて、そこに合うような一反をするべきってことですか。一反だけでどうこうではなくて」

西「それもあるし、それと落としどころは二反にはなるんだけど、一反の段階で相手の立論がどう見えるようになるかっていうのも大事な話だと思っていて。そこまでの一反の持って行き方っていうのもストーリー性と言われる理由かもしれないと思います。例えばさっき言ったように色んな論点にとりあえず打ってって、というのでは結局どこが削られててどうなっているのか、全体像が見えにくい。それに対してしっかり手順を踏んで『相手が問題にしてたことは小さくて、さらに解決するのは別のところだよな』みたいに一反が終わった段階で相手の立論をどう見せるかっていうところに上手く持っていくのも、一反のストーリー性では思います」

泉「今の話だと、例えば否定一反だったら内因性・解決性・重要性それぞれを抑えるのが大事ってことなんですかね」

西「どちらかという内因性・解決性・重要性って分かれてるから大事というよりは、相手の立論にも話の流れみたいなものがある。バランスよく打つよりは、相手が思ってる話の流れじゃなくて自分たちが思ってる話の流れに持っていける反駁があれば良くて。例えば解決性を重点的にアタックして、自分たちの世界に持っていって、相手の立論は実はこうなんだ、みたいに見せるんだったらそれは解決性ばかりでいいと思うし。あとは確かに相手が言ってることは発生するけど、それはあまり重要じゃないよね、って言いたいときは重要性に重点的にアタックしていったりっていうのもあると思うから。そこに関して、内因性だから1個反駁しよう、解決性だから1個反駁しよう、って感じじゃなくて。自分たちが見せたいように見せられる反駁にすればいいんじゃないかなと思います」

泉「その、自分たちの思ってるストーリーに持ち込むっていうのは、例えばこの前の中1中2杯（義務投票制）で僕のチームがやってたような、肯定側に対して『政治家が若者を取り込もうとするっていうのはわかったけど、若者がそういう政策を選べる証明はしてないよね、実際選べないよね』みたいな反駁ってことですか」

西「そうそう。それは結構ストーリー性としていいと思うよ。」

泉「相手の立論には若者が政策を選ぶっていうストーリーは含まれていなくて、それを明らかにして、そこで切れてるよね、で自分たちのストーリーに持ち込むみたいな」

西「それは反駁としていいと思います」

泉「ちなみにその反駁をやったときに、決勝の鈴木戦で『若者が政治を選ぶ話じゃなくて、政治家が取り込もうとするだけでいいんだ』という再反駁をされて上手いなあと思ったんですけど、ジャッジとしてはそのストーリーの優位性みたいなものってどうやってつけるんですかね」

西「なるほどね。ストーリーの優位性って言っても、今の話でも両立する話ではあると思っていて。だからこの場合だとどちらも取って、若者が選ぶところはなくなっているね、政治家が取り込もうとするのも重要なんだね、ってなると思う。」

泉「じゃあ立論をあまり削っていない感じなんですかね」

西「んー、削ってないわけではないと思ってて。若者が選ぶことによって発生して落ちてくる重要性和、政治家が取り込もうとするだけの重要性は違うものになってくるだろうから。その点で割と投票基準は変わってると思う」

泉「なるほど。質問から発展して話が広がってるんですけど、ポイントとしては一反だけでストーリー性を考えるのではなくて二反の勝ち筋で考えるというのと、一反の段階でどう見えるかも大事で、自分たちの思っているストーリー性に持ち込めたらいい反駁ってことですか」

西「そうだと思います」

泉「ありがとうございます。次の質問は『もし、準備時間になって使える資料が全然ないってなったらどうしますか』

西「それはそもそもチームとして良くて、準備時間の段階で使える資料がないっていうのでは遅くて。準備時間が始まる段階で使える資料はある程度決まっていて、足りない部分を口反とか立論伸ばして当てたりすると思うんだけど。準備時間で資料を探してるのは、資料ありきでカードゲームみたいになっちゃってるし、チームのやり方としてよくないです」

泉「じゃあ理想としてはどういう準備がいいですか」

西「例えばテンプレとか資料があって、立論を読まれているときに、ここに対してはこの資料だっていうのをフローに書き込んでおいて。どんな資料だったかなって曖昧なときは確認してもいいとは思うんだけど。資料を探して、この資料をどう当てるか、じゃなくて。資料をもとに考えるというよりは、どの順番で打つかみたいな構成を考えるほうが、準備時間の構成としていいと思います」

泉「ありがとうございます。じゃあこれが最後の質問なんですけど、2020年の抱負を教えてください」

西「抱負!？」

泉「はい。もう4月なんですけど(笑)」

西「ごめん抱負っていう意味がよくわかんないからググる」

西「抱負って目標とは違うの？」

泉「まあ大体目標ですよ。ちゃんと意味を理解して使ってる人なんて僕を含めてあんまりいないと思います」

西「なるほど。二〇二〇年の抱負って言われてもなあ。なんだろう」

泉「そもそも大会があるかわかんないですからね」



西「そうだね」

泉「仮にディベート甲子園が開催されるとして、個人としてはどこまでを狙いますか」

西「まあそれは全国ベストディベーターじゃない。個人としては」

泉「なるほど。ちなみにそれは、どのポジションでやりたいとかはあるんですか」

西「んー、まだ論題がわからないからどのポジションが楽しいかわからないし、どこで獲りたいってのはないし」

泉「ポジションにそんなに拘りはないと」

西「うん、拘りはないです」

泉「そうですねー。全ポジションできちゃう人はそうですね。ちょうど三〇分くらいで、用意していた質問は終わりです。これを読むのは主に中二・中三なんですけど、一反について伝えておきたいことはありますか」

西「一反はめちゃくちゃ、多分一番難しいポジションだってことを言っておきます」

泉「その難しさっていうのは、どういう部分ですか？」

西「さっき言ったように、ディベートの四つのポジションの中では起承転結の転に当たっていると思っていて。二反ベースに考えていくと、『結』、例えば肯定二反として落としどころを見つけると言うのと、もう否定二反まで終わっていて、割と勝ち筋っていうのは見えていてそこに向かって一直線で突っ走っていくのが二反。それに対して一反段階だと試合のクライマックス、落としどころがイマイチ見えていない状況、そこが『転』で、今までの立論の流れを壊して自分たちの勝ち筋の方向に向かわせるんだ、っていう。これが二反と違って、内因性に打つかもかもしれないし解決性に打つかもかもしれないし重要性に打つかもかもしれないっていう、選択肢もいっぱいあって、その中でベストな反駁で繋げるっていうのが難しいと思います。」

泉「料理での例えを聞いてことがあって、立論が材料を出して二反が盛り付け、一反が調理だっていう話があるんですけど、調理が一番難しそうですね」

西「そうだね」

泉「質疑どうしたって感じなんですけど下ごしらえですかね。それで、特に難しいのは肯定一反ですか？」

西「うーん、割と肯定一反も忙しいって言われるけど、相手の立論を聞いている段階で反駁考えたりとか、相手の一反聞いている段階で再反作っちゃうとかしていけば、そんなに準備時間が重要じゃないように感じられるから。そこで、忙しさの差っていうのは感じなくなってきています」

泉「否定一反が比較的簡単だって言われるのは、肯定立論を聞いてからずっと準備できるからだと思うんですね。それに対して肯定一反は直前の否定一反に対しても応答していかないといけないから、その違いはちょっとあるかもしれないですね」

西「そうなんですけど、その準備時間が、たくさん準備できるから劇的に反駁の質が向上するかって言ったらそうではないから。それで否定一反が直前のパートだからって肯定一反の準備が難しいかって言われたらそうは思わなくて。否定一反の中で準備すれば、準備時間は暇になってきたりするし。否定一反と肯定一反の差はそんなにない気がします」

泉「ありがとうございます。この三〇分で一反に対する見方が結構変わりました。最後に、一反の練習方法はあったりしますか」



はじめに

大会記

自由記事

付録

質問掲示板 >

先輩と語る一反 >

先輩と語る質疑 >

西「一番手っ取り早い方法は試合で一反をすることだし。あと普段のニュースとか、なんでもいいけど例えばコロナでマスク二枚配布とか、反対意見もいっぱいあるじゃん。そういうので、反対意見の中でも反対できてないようなものもあるし、反対意見として成立しているものもあったりして。だから一反っていうのは普段から、いかに自分で考え方を持つかっていうところで練習になると思います」

泉「議論を見る目ってことですね。これは一反に限らずあらゆるポジションの練習になるかもしれないですね」

西「そうだけど、特に一反が向上しやすいかと思います」

泉「なるほど。以上で大体終わりです。ありがとうございました」

西「ありがとうございました」